

# 主は、生きておられる

Unser HERR lebt

2022 graph magazine vol. **59**

Unser  
HERR  
lebt

Unser  
HERR  
lebt  
主は、生きておられる

まことに、まことに、あなたに告げます。  
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。(ヨハネ3・3)

vol. **59** 定価100円(税込み)

Unser  
HERR  
lebt  
主  
は、生  
きておられる

主  
は、生  
きておられる  
Unser HERR lebt



## メッセージ

- 4 イエスの救い(8) おきてからの解放 ゴットホルド・ベック
- 22 再生の希望を与えられる主 佐藤 亮

## 6人の証し

- 32 ひと足ひと足主にすがりて 前山 幸子
- 40 私たちの転機とその後 國川 憲三
- 50 みことばのすべてはまことです 黒津 君子
- 60 主、我<sup>われ</sup>を愛す 平井 成子
- 69 人間にとってすべては 田中 順子
- 78 すべてが主の御手のままに 早川 節子

## メッセージ

- 84 神は愛です ゴットホルド・ベック
- 90 大切なことについて ゴットホルド・ベック

# イエスの救い(8) おきてからの解放

ゴットホルド・ベック

振り返ると、主イエス様を受け入れる前、私たちは次のような人生を過ごしていたと言えると思います。何年間もずっと、神なく望みなくさまよい、何のために生きているのか意味もわからず生きていました。心の奥底には満足がなく、望みはただ地上にあるものに置かれ、自分の願いがかなえられたらそれを無上の幸せとしていました。

このような時、神の御子、主イエス様が全人類のために成し遂げられた救いの御わざを聞き、驚くべき福音を知りました。そのうち、しだいに自分は救われ難い罪人であり、罪の内に死んでいて、どうしても身代わりに死んでくださった神の御子、主イエス様の救いを受け入れなければならぬことを知るようになって

きました。それから、「主イエス様、私は滅びなければならぬ罪人です。あなたは聖なるお方です。どうか、御子イエス様の血潮によって私の罪を赦し、お救いください」と祈って主イエス様を心の内にお迎えするまでの間に、非常に激しい心の戦いを経験しました。そして今は、御子イエス様を受け入れた喜びと平安に満たされ、幸いな生涯に入れています。

ところが、罪は赦されたけれども、自分の内には依然として罪が残っていて、いつまでたっても同じ罪を犯してしまうということに気づくようになりました。その悩みの中で、イエス様の死によって私たちの罪が消し去られただけではなく、私たち自身も古い人がイ

エス様とともに十字架につけられたことを知りました。「私はキリストとともに十字架につけられてしまったのだ」と、わかった時のことは終生忘れえない一つの大きな経験でした。

この経験に続いて、「私はキリストとともに死に、ともによみがえらされた」という驚くべき知識が、自分のものとなってきたのです。そのとき同時に、「すでに尊い血潮に贖<sup>あがな</sup>われたがゆえに、もはや私は自分のものではなく、主のものである」ということがわかりました。

その結果、全身全霊を主イエス様におさげしたいと願い、イエス様におゆだねするようになりました。「主イエス様はこんな私たちのために、驚くべき救いの御わざをなしてくださいました。これから私は、イエス様のために尽くしたい」という願いが湧いてきました。またさらに進んで、主に喜ばれることは、主のため、にあれやこれやと何かをすることではなく、「主の御心を尋ね求めそれに従うことである」とわかってきました。

イエスの救い(8) おきてからの解放

私たちの大部分の人々が、このように信仰の道を進んで来たことと信じます。

まことの献身者とは、主の御心を行なう人です。主イエス様がそうであったと同じように、「私の思いではなく、主よ、あなた様の御心がなりますように」と願う人です。また主イエス様の母マリアのように、「みことばの通りになりますように」と願う人がまことの献身者です。

ところが、何をするにも主の御心にかなうようにと願っていないながら、自分の心のどこかに、実際はそうしたくはないと、とどめようとする何者かが潜<sup>ひそ</sup>んでいることに気づき始めます。それを発見した時、今までの経験を疑い始めます。

「ほんとうに自分は主イエス様とともに十字架につけられたのだろうか？ あを示されたことは間違いだっただろうか？ いや確かにあれは主に教えられたことだ。それでは私は主イエス様にすべてを明け渡さなかったのだろうか？」と疑います。確かに自分の



生涯を主に明け渡したはずだが、それでいてなお、自分の内に何か違う、神に反する分子が潜んでいます。ただ主イエス様だけに仕え、主に喜ばれたいと願えば願うほど、失敗してしまいます。

そのような時、あれが罪だったのだろうか、これが不従順だったのだろうかと過去を振り返って思いめぐらし、それを主に告白して、勝利の生活に入ろうとします。けれども、祈って立ち上がるや否や、また失敗して敗北の生活に入ってしまうのです。「以前、主にこの身をおささげた決心は不完全だった。今から改めて、この身をすべて主におささげしよう」と思います。しかしそれもやはり無駄で、以前と変わりがありません。ローマ人への手紙7章18、19節でパウロが叫んでいるように私たちも叫ぶようになるまで、くり返すでしょう。

私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。

私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。(ローマ 7:18-19)

ここまで述べてきた信者としての霊的戦いは、ローマ人への手紙7章の記述にすべて含まれています。つまり、おきての支配からの解放です。

今回はこのテーマについて三つの点に分けてご一緒に考えたいと思います。第一番目、おきてが私たちに教えていること。第二番目、おきての終わりであるキリスト。そして第三番目に、自分を見限ることの祝福です。

## 1. おきてが私たちに教えていること

神のおきてはモーセの十戒にまとめられており、主イエス様はそれを山上の垂訓<sup>すいくん</sup>で説明しています。さらに主イエス様がおきてを要約して言われたみことばが、マタイの福音書22章36節から40節までにあります。

「先生。律法の中で、たいせつな戒めはどれですか。」そこで、イエスは彼に言われた。「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。『これがたいせつな第一の戒めです。』あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです。律法全体と預言者たちが、この二つの戒めにかかっているのです。」

(マタイ 22:36-40)

おきては私たちに何を教えているのでしょうか。私たちは、物の長さを測るために物差しを使います。同じように、何が正しいか、何が悪いかを知るためには神のおきてを用います。しかし今日の世界を見ると、善悪を測る尺度は人間の判断になってしまっています。その結果、国々の間で争いがあり、また人々の間にも不和と不一致があります。

私が茨城県なかにの那珂湊みなとに住んでいた頃の話ですが、近所の八百屋やで買い物をしました。新米しんまいの店員が「これ

は、だいたい○○円です」と言ったので、そのとおりの額を支払い、品物を受け取りました。その言い値がふつうの値段より安かったなら幸いですが、もし、店員のだいたいで見積もられた金額で、その金額に見合う半分相当の品物しか受け取れなかったとしたら大変です。

人々は、この「だいたい」ということばで物事を曖昧あいまいにしていることが少なくありません。罪についても「まあ、これくらいなら許されるだろう」と、ごまかしてしまいます。人が善悪を判断する時、いつも曖昧な判断しかできません。

しかし神様の場合は全く違います。そのため、神様は人々に明確な「はかり」として、おきてをお与えになったのです。

神が私たちの真の姿をご覧になっているのと同じように、おきては私たちが自分の姿を見ることのできる唯一の鏡です。つまりおきてによって、人間の罪が映し出されます。ローマ人への手紙7章にこのように記

してあります。

それでは、どういうことになりますか。律法は罪なのでしょうか。絶対にそんなことはありません。ただ、律法によらないでは、私は罪を知ることがなかったでしょう。律法が、「むさぼってはならない。」と言わなかったら、私はむさぼりを知らなかったでしょう。

(ローマ 7・7)

そして同じく3章20節に「なぜなら、律法を行なうことによつては、だれひとり神の前に義と認められないからです。律法によつては、かえつて罪の意識が生じるのです。」と書き記されています。私たちは自分から進んでこの鏡の前に立つでしょうか。それとも罪を意識しないよう、鏡の前から身を隠すのでしょうか。ダビデは自らの姿を映し出していただくために、あえて神の鏡の前に立ちました。「神よ、どうか、わたしを探つて、わが心を知り、わたしを試みて、わがもろもろの思いを知つて

ください。わたしに悪しき道のあるかないかを見て、わたしをとこしえの道に導いてください。」(詩篇139・23～24口語訳)と詩篇で祈っています。

何とかして真理を知りたいという飢え渴きがなければ、ダビデのように鏡の前に立つことはできません。多くの人々は、半分暗闇の中に入っていて、光に来ようとしません。裸のままの姿で主の前に立つことをしません。

かつて主イエス様は、光に来ようとしないう人々を見て嘆かれました。ヨハネの福音書には次のように書かれています。

そのさばきというのは、こうである。光が世に来ていのに、人々は光よりもやみを愛した。その行ないが悪かったからである。悪いことをする者は光を憎み、その行ないが明るみに出されることを恐れて、光のほうに来ない。

(ヨハネ 3・19～20)

今日多くの人々はこれと同じ状態です。暗黒の中にいるにもかかわらず、そのままそこに住み続けたいと願うのは、ほんとうに恐ろしいことです。このような人々は、やがて神の御前に立たされた時、目が覚め、自らの滅び行く様を見て恐れるでしょうが、その時はすでに遅すぎます。がんの患者が医者忠告を聞かず、生活を享樂したために好きなことをすれば、恐ろしい結果になってしまいます。神のおきてに耳を貸さない者は、なおさら恐ろしい結果になってしまいます。

おきては、いつも私たちの罪、咎を暴き立てます。おきての光に照らされると、「自分は罪人だ、咎ある人間だ」と叫ばざるを得なくなります。聖書は言っています。

というのは、律法の行ないによる人々はすべて、のろいのもとにあるからです。こう書いてあります。「律法の書に書いてある、すべてのことを堅く守って実行しなければ、だれでもみな、のろわれる。」(ガラテヤ 3・10)

イエスの救い(8) おきてからの解放

神のおきては神によつて与えられたものですから、聖なるものであり、正しく、善なるものです。ローマ人への手紙7章12節には「律法は聖なるものであり、戒めも聖であり、正しく、また良いものなのです。」と書いてあります。ですから、おきてそのものは良いものなのですが、おきてを守らなければならないはずの人間が、罪を犯し、守ることができない者となつてしまつてい

るのです。例えば、「東京都民すべてに二千円の税金を課す」という条例があつたとします。条例は妥当なものと仮定しましょう。しかし、わずか二十円しかない人々は、この法を守ることができません。

また多くの人々は、一見したところおとなしい良い人のように見受けられますが、誰かに何かを要求されるとすぐに不機嫌になつてしまいます。幼い子供たちを見ると、大人は「かわいい、かわいい」と言いますが、そんな子供もひとたび何か気に入らないことを言いつけられると、首を横に振つて言うことを聞きません。

私たちも、これと全く同じです。

私たちの生まれながらの性質は罪です。おきてはこの私たちの罪の性質が露わにされるために与えられました。もう一回言いましょうか。おきては、私たちの罪の性質が露わにされるために、神によつて私たちに与えられたのです。

おきてはこう命じます。「偶像を拜んではならない。姦淫してはならない。偽証してはならない。心を尽くしてあなたの神を愛せよ」。そして「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」と。何とかしてこのおきてを忠実に守ろうとする人は皆、やがて自分が罪人であり、どうしてもおきての全部を行なうことができないということを知るに至ります。このように、おきてが与えられたのは、私たちの罪の性質が露わにされるためです。

主である神は、私たちが頭のテッペンから足の爪先まで罪に染まり、汚れ果てていることをよくご存じです。ところが人間は、この醜い自分の真相を知らない

ままにいる、ということが問題です。自分自身の真の姿を知るために、主である神は私たちにおきてを与えてくださいました。神は、私たちがおきてを守ることができないことを知っておられながらも、私たちにおきてをお与えになりました。

実は神は、私たちがおきてを破るよう、おきてをお与えにされたのです。おきては人間の罪が増し加わるために与えられました。ローマ人への手紙5章20節に「律法がはいつて来たのは、違反が増し加わるためです。」と書いてあります。パウロもこのことを体験しています。7章7節を見ると、「それでは、どういうことになりますか。律法は罪なのでしょうか。絶対にそんなことはありません。ただ、律法によらないでは、私は罪を知ることがなかつたでしょう。」と書いてあります。神のおきてによつて、私たちのほんとうの性質が露わにされます。そして自分は徹底的に罪にまみれ、汚れ果て、このままではどうしても聖い神のみこころにかなうことができないということを教えてくれます。

私たちはすでに、この段階にまで到達したでしょう

か。主なる神はおきてを人間にお与えになった時、「人間はこのおきてを守るができるかも知れない」とはお考えになりませんでした。「必ず、与えるおきてを人間は破る」とご承知で、私たちにおきてをお与えになったのです。私たちがおきてを守ることができない無力な存在であることを徹底的に知らされた時、おきての役目はそれで果たされたことになるのです。すなわち、おきては私たちをキリストに導くための養育係であるとパウロは言っています。

こうして、律法は私たちをキリストへ導くための私たちの養育係となりました。私たちが信仰によつて義と認められるためなのです。 (ガラテヤ 3・24)

もう一度、お読みします。「こうして、律法は」、つまり神の与えられたおきては「私たちをキリストへ導くための私たちの養育係となりました」。それはキリストを信

じた「私たちが信仰によつて義と認められるためなのです」。私たちがおきてによつてキリストに導かれる時、それまで守ることのできなかつたおきてを、主イエス様ご自身が守らせてくださいます。

## 2. おきての終わりであるキリスト

次に第二番目の点、おきての終りであるキリストについて、一緒に考えてみたいと思います。ローマ人への手紙10章4節によると、イエス・キリストは、おきての終わりである、つまり「キリストが律法を終わらされた」と書いてあります。このことを詳しくみことばから見みましょう。ローマ人への手紙にはこう記されています。

というのは、罪はあなたがたを支配することがないからです。なぜなら、あなたがたは律法の下にはなく、恵みの下にあるからです。 (ローマ 6・14)

イエスの救い(8) おきてからの解放



おきてからの解放が問題です。解放とは、より高いものに結び付けられることです。束縛とは、低いものに結び付けられることです。ヨハネの福音書8章36節に、イエス・キリストの次のような約束があります。「ですから、もし子があなたがたを自由にするなら、あなたがたはほんとうに自由なのです」。主イエス様にしっかりと結び付けられることが、真の自由を得ることになるのです。

恵みとはいったい何でしょうか。おきてとは何なのでしょうか。

恵みは、「神が」私たちに御子イエス様を与えてくださり、イエス様が私たちの内に生まれ、おきてを守ってくださり、真の自由を与えてくださったことに現われています。

これに対しておきては、「私が」主のために何かを行なうことであり、自分の力でおきてを守ろうと試み、そして主に喜ばれようと努める、この態度がおきてにある態度です。しかし、この結果はどうでしょうか。主の

み心を知り、これを行ないたいと願いますが、いつも失敗に終わってしまいます。

ローマ人への手紙6章は、「罪」からの解放について書いてあります。そして比喩として、「主人と奴隷」が使われています。罪と罪人の関係は、主人と奴隷の関係であると聖書は言っています。

ローマ人への手紙7章では、「おきて」からの解放が語られており、6章14節「というのは、罪はあなたがたを支配することがないからです。なぜなら、あなたがたは律法の下にはなく、恵みの下にあるからです。」の説明を含んでいます。そして比喩として、「夫と妻」が出てきます。おきてと罪人の関係は夫と妻の関係です。これを少し考えてみましょう。

ここに、一人の婦人と二人の男がでています。婦人は今、あまり好きでもない男と結婚しています。もう一人の男の方をよほど愛しています。しかし残念ながら、婦人は一人の夫しか持つことができません。

結婚している夫は別に悪い人ではありません。ただ相性が悪いだけです。夫はいつも曖昧なことが嫌いです。一方、この妻は何でも曖昧にしておきたいのです。

このように二人の生き方が違いますから、幸福に仲良く暮らすことができません。夫は非常に厳しいのです。いつも妻に「こうしなさい、ああしなさい」と要求します。しかし、夫は夫として当然のことを言っているだけであって、別に間違ったことを妻に要求するわけではありません。悪いのは妻が夫に聞き従うことができないことです。このようにして暮らすうちに、ますます二人の間の隔たりが大きくなります。妻は自分の欠点をよく知っています。何とか夫に従おうとするのですができません。妻の言うこととなすことは、いつも間違つてばかりだからです。妻は絶望してしまい、他の夫を求めます。その意中の男は、今の夫のように曖昧を嫌う厳しい人ですが、ただ一つ大きな違いは、妻に命令することを彼自身が助け、妻と一緒にやってくれるという点です。何とかしてこの新しい人と結婚し

たいのですが、残念ながら今の夫が生きているうちにはできません。

パウロはこれを、おきてと人の間をあらわす比喩として用いているのです。

「第一の夫」は神の戒め、おきてであり、「妻」は、何とかして神のみ心になおようと努めていながら、できないため息をついている私たちです。「第二の男」は、おきてを私たちの内にあって行なうことができるようにしてくる、主イエス様を表わしています。おきては、私たちの内にいろいろなことを要求しますが、私たちを助けてくれません。しかし主イエス様は、おきてよりもっと高い要求をされるお方ですが、私たちの内に住まれ、ご自身で私たちを助け、その要求を行なってくれるお方です。だから、妻は今の夫と離れて第二の男と一緒にいたいと願うのです。妻の願いは、一日も早く今の夫が死んでしまうことです。夫は死なない限り、決してその結婚は解かれませんが、夫が元気でいっこうに病気になるらず死にそうもないの

を悲しく思います。イエス様はマタイの福音書5章にある有名な説教の中で、おきてについて次のように言われたのです。

まことに、あなたがたに告げます。天地が滅びうせない限り、律法の中の一点一画でも決してすたれることはありません。全部が成就されます。(マタイ 5:18)

これを見ると、おきてである第一の夫は決して死なない、永遠に生きていることがわかります。どうしても私たちはおきてを守らなければならないことがわかります。

では、私たちはどうしたら第二の夫である主イエス様と、一つになることができるのでしょうか。ローマ人への手紙7章1節から3節までを見ると、はじめの夫が死ねば、第二の男と結ばれてもよいと書かれています。4節には、夫の死ではなく「妻の死」、つまり私たちの死ぬことが書かれています。

それとも、兄弟たち。あなたがたは、律法が人に対して権限を持つのは、その人の生きている期間だけだ、ということを知らないのですか。——私は律法を知っている人々に言っているのです。——夫のある女は、夫が生きている間は、律法によって夫に結ばれています。しかし、夫が死ねば、夫に関する律法から解放されます。ですから、夫が生きている間に他の男に行けば、姦淫かんいんの女と呼ばれるのですが、夫が死ねば、律法から解放されており、たとい他の男に行っても、姦淫の女ではありません。(ローマ 7:1-3)

私の兄弟たちよ。それと同じように、あなたがたも、キリストのからだによって、律法に対しては死んでいるのです。それは、あなたがたが他の人、すなわち死者の中からよみがえった方と結ばれて、神のために実を結ぶようになるためです。(ローマ 7:4)

おきては永遠にとどまります。しかし、もし私たち

がおきてに対して死ぬなら、おきてから自由な身となることができます。どんなおきても、それを課された人が死んだら、その人の身におきてとしての力を及ぼすことはできません。第二次世界大戦の時ドイツの空軍大臣であったヘルマン・ゲーリングは、終戦後死刑を宣告されました。しかし執行される前に毒を飲んで彼は死んでしまったのです。ゲーリングが死んだとき、死刑という判決は自然に消えてしまったわけです。

同じように、神の戒めから解放されるには、私たちが死ななければなりません。もし「私たちが死ぬなら」、第一の夫がどんなに命令しても、私たちには何の関わりもありません。

ここで問題なのは、ではどのようにして死ぬかということ。私たちの死に方がローマ人への手紙6章4節に書かれています。

私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによつ

て、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあつて新しい歩みをするためです。(ローマ 6:4)

もう一回、お読み致します。「私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによつて、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあつて新しい歩みをするためです」。そしてコリント人への手紙第一の1章30節には「しかしあなたがたは、神によつてキリスト・イエスのうちにあるのです」と書いてあります。つまり、神は私たちをキリストの内に置かれました。ですから主イエス様が亡くなられた時、私たちも主とともに死んで、墓に葬られたのです。そして主イエス様がよみがえられた時も、私たちは主イエス様の内にあったので、ともによみがえらされたのです。

ローマ人への手紙7章4節にあるみことばをもう

イエスの救い(8) おきてからの解放

一度見ましょう。」「…あなたがたも、キリストのからだに  
よつて、律法に対しては死んでいるのです。それは、あなた  
がたが他の人、すなわち死者の中からよみがえった方と結  
ばれて、神のために実を結ぶようになるためです。」と書  
かれています。

ここで、聖徒たちは「律法に対しては死んでいる」と  
あります。つまり妻は死によつて、第一の夫から解放  
され、第二の男と結婚することができなのです。その  
目的は「他の人」と結ばれて、神のために実を結ぶよう  
になるためです」と言われています。この「他の人」、つ  
まり主イエス様は、自分が命令したことを自ら成し遂  
げる力を持つておられます。

「第二の男」と結婚した結果、妻は一体どうなるので  
しょうか。それまで溜め息をつき、悩んでいた妻は、神  
のために豊かに実を結ぶようになります。「他の人」と  
結ばれて、神のために実を結ぶようになります。妻の  
内に宿った主イエス様の復活の力、よみがえりのいの  
ちは神の実を結ぶ力です。もう「妻」は努力しておきて

を守り、神に仕え、神を喜ばせようとする必要はあり  
ません。内に宿られた主イエス様ご自身が、すべての  
ことをなせるようにしてくださるからです。そして主  
のなさることはいつも神に喜ばれます。

使徒パウロはコリント人への手紙第二の11章2節に、  
もうすでに福音にあずかった人に向かつて次のように  
書いています。

というのも、私は神の熱心をもって、熱心にあなたが  
たのことを思っているからです。私はあなたがたを、清  
純な処女として、ひとりの人の花嫁に定め、キリストに  
ささげることにしたからです。（2コリント 11:2）

乙女が結婚すると何が起こるでしょう。ふつう、夫  
の姓を名乗るようになります。それだけではなく、夫  
の所有している物も自分のものとなります。もし私た  
ちがキリストのものになると、同じことが起こります。  
私たちはキリストの名を名乗り、主イエス様の持つて

いるすべてのものを自分のものとするようになるので  
す。もし私たちが、「主の持つておられるすべてのもの  
を私も持つている」という確信に立つなら、神のご命  
令に従うことは簡単なことです。ですからヨハネは次  
のように書いたのです。

神を愛するとは、神の命令を守ることです。その命  
令は重荷とはなりません。（1ヨハネ 5:3）

神の命令は重荷にはならないと、ヨハネは告白して  
います。何という恵みでしょう。

### 3. 自分を見限るいのちの祝福

最後に、自分を見限ることの祝福、つまり霊的破産  
のもたらす祝福について考えたいと思います。ある兄  
弟が勝利の生活を願ひ、非常に悩み、他の兄弟にどう  
して自分はこんなに弱いのだろう、私はどんなに努め

ても勝利の生活に達することができないと漏らしまし  
た。すると相手の兄弟が言ったそうです。  
「君が主のみ心になう生活をしたいと願っている  
ことは幸いだ。そして努力してもできないというのを  
知ったことは、なおさら良いことだ。しかし君は自分  
は弱い弱いと言うが、まだ弱り切つてはいない。もし  
ほんとうに、徹底的に弱くなり切ったなら、少しも試  
みられることはないはずだ。もし弱くなり切ったら、  
君のすることは、始めから終りまで主がなしてくださ  
るだろう」と。

私たちもみな「自分は何もできないまったく弱い存  
在です。主よ、どうか私のためにすべてをなしてくだ  
さい」という点にまで来なければなりません。水に溺  
れる人を助ける時、溺れている人がもがいて暴れる元  
気のあるうちは助けることができません。自分で動く  
力のある人を助けに行くと、助けに行った方も、しが  
みつかれて共に溺れてしまいます。しかし弱り切つて



まったくもがく力がなくなった時、簡単に助けることができます。同じように、第一の夫を愛そうと努力を尽くしても駄目だったあの妻のように、私たちがまったく自ら努力することをやめ、霊的に破産するのを主は待つておられます。

私たちはしばしば、自分には主に仕える力があると考えます。そのような時、全然、十字架の意味を知っていないことになります。愛する皆さん、十字架は私たちに對する神の判決です。私たちには十字架の刑が一番ふさわしいのです。

主に喜ばれたいと願って自らする努力は、やがて「私は…売られて罪の下にある者」(ローマ7・14)、また「私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです」(ローマ7・18)、そして「肉にある者は神を喜ばせることができません」(ローマ8・8)という自覚を私たちのうちにもたします。

叫びです。これは人のなしうる、もっとも霊的な叫びです。これは、人がまったく自らを見限った時、霊的に破産した時、はじめてたましいの底から出てくる叫びです。

私たちは、すでに自分自身に絶望したでしょうか。それとも祈ることにより、みことばを学ぶことにより、より良いクリスチャンになろうと努めているのでしょうか。

パウロは、いろいろな行ないが私たちを救うとは言っていない。ただ主イエス様だけが救うことのできるお方であると言っています。パウロは以前には、自分でことを解決しようと努めました、ついにそれができないのを知り、自らの努力をやめました。その途端、主の祝福が注がれました。パウロはその時、喜びの声を上げたのです。

私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。  
(ローマ 7・25)

イエスの救い(8) おきてからの解放

ローマ人への手紙7章1節から3節までの妻、そして7章15節から19節までのパウロは、主を喜ばせたいと願って努力したのですが、反対のことしかできませんでした。このようなことを、私たちももうすでに経験済みでしょうか。私たちは神を喜ばせたいと願って行動しますが、実際には自分自身か人を喜ばせるためにやっつけてしまいます。祈ろうとすれば眠くなり、聖書を読もうとすれば気が進まないという状態です。

パウロがローマ人への手紙を書いたこの時代の殺人の罪に對する刑罰は、死ぬまで死人の体を自分の身に背負って歩むという恐ろしい刑罰でした。パウロは、自分自身ちやうど、この恐ろしい刑罰を受けている者のようだと、言っています。死人が自分の体から離れず、自分がどのようににしても解放されそうもない、哀れな自らの姿を嘆いています。パウロは「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」(ローマ7・24)と叫んでいます。この主に向かつての叫びは、神の喜ばれる

私たちはどのようにして罪の赦しをいただいたのでしょうか。祈りによってでしょうか、みことばを学ぶことによってでしょうか、また捧げることによってでしょうか。そうではありません。十字架を仰ぎ、主がそこで私たちのために何をしてくださったかを知ったからです。

それでは、私たちはどうしたらおきてから解放され、主に喜ばれる生活をすることができるでしょうか。

あれをやり、これをやり、またあれを止め、これを止めたりすることによってではなく、内住の主イエス様を心から信じ、感謝し、主にすべてをなしていただくことによって、完全な解放と主に喜ばれる歩みをするができるのです。罪の赦しは、主イエス様がなさったことを単純に信じ、感謝することによりいただけますが、おきてからの解放は、主イエス様が、今私たちの内でなしてくださることを単純に信じ、感謝することによっていただくことができます。

ドイツに次のような歌があります。

かつては 聖い生活を送ることができないと思った  
それは 自分の力で聖くなろうと努めていたから  
今は 主が私に聖さを与えてくださった  
主ご自身が 私のうちにすべてをなさってください

かつては 自分の力で親切になり愛にあふれ  
柔和であろうと努めた

今は 主イエス様が私のうちに住みたまい  
ご自分の似姿に私を変えようとしておられること  
を知った

かつては しだいに勝利の生活が送れるようにな  
るとは夢にも思わなかった

今は 主ご自身が私のうちに住みたまい  
私の歩みを勝利のうちに保たれることを知った

かつては 懸命に主のうちにとどまり主に喜ばれ  
ようと必死に努めた

今は 主ご自身が私のうちにみわざをなされるま  
まにしている

いま私は 主にあり主は私のうちにおられたもう

ローマ人への手紙 8 章 37 節にこう記されています。

しかし、私たちは、私たちを愛してくださった方に  
よって、これらすべてのことの中にあつても、圧倒的な勝  
利者となるのです。

(ローマ 8・37)

そしてパウロは、ピリピ人への手紙 4 章 13 節におい  
て言っています。

私は、私を強くしてくださいる方によって、どんなこと  
でもできるのです。

(ピリピ 4・13)

私たちも、一人ひとりが、同じように言うことがで  
きればほんとうに幸いです。



本メッセージは、「ロバの子サーバー」の「ベック兄 暦年ファイ  
ル」に録音されています。

次回掲載予定は、「イエスの救い(9) 御霊による歩み」です。

イエスの救い(8) おきてからの解放

# 再生の希望を与えられる主

佐藤 亮

神のことは伝える聖書には、一度は神のみこころに背いて暗闇に落とされながらも、苦難の経験を通された後に、主のもとに立ち返る人々が数多く登場します。

ダビデ王は、大きな罪を重ねましたが、悲劇的な体験を経て、再び主に従うものとなりました。イエス様を三度否んだペテロは、復活した主との交わりの中で信仰を取り戻し、主の教えを伝えるためにその生涯をささげるようになりました。

私たちの手元にある聖書とは、ある見方をすれば、神に背を向けながら、絶望の中で自分が失ったものの大きさに気づき、再び主を愛するものとなった人間たちの経験が集められた書物であるとも言えます。

主に対する信仰を取り戻した二つの例を並行して追

いながら、主がいかに人の再生と回復を願っておられるかということを考えてみたいと思います。

## 捕囚の民の苦難

エゼキエルが預言者として召されたのは、捕囚の民とともにバビロンに居る時でした。かつて神はイスラエルに豊かな恵みを注いでいました。しかし、繁栄を極めるにつれて民の心は、神から離れていきます。国の危機に際し、周辺の大国と妥協して生き延びることを選り、神の都にすら異教の神々の祭壇を築いて、偶像で汚すことを許したのです。

神は、エゼキエルに啓示を与え、民へのさばきとし

て、彼らの上に苦しみをもたらすことを宣告されます。

あなたのみだらな汚れを見て、わたしはあなたをきよめようとしたが、あなたはきよくなろうとしなかった。それでわたしがあなたに対するわたしの憤りを静めるまで、あなたは決してきよめられない。

(エゼキエル 24・13)

このみことばのとおり、民の多くが、故郷から遠く離れた異国へと連れ去られたうえ、エルサレムの都も破壊されて、彼らは絶望の淵に落とされました。そのころ、エゼキエルは、谷底に積み重なった干からびた骨の幻を見られます。

主の御手が私の上にあり、主の霊によって、私は連れ出され、谷間の真中に置かれた。そこには骨が満ちていた。主は私にその上をあちらこちらと行き巡らせた。なんと、その谷間には非常に多くの骨があり、ひどく干

再生の希望を与えられる主

からびていた。

(エゼキエル 37・1～2)

生命を宿していない骨は、異教徒の奴隷としての生活を強いられる中で、希望を失った人々の姿でした。しかし、主は、民の背信に激しい怒りを示されながらも、彼らに理由もなく試練を与えたのではないことを告げられました。

それは、わたしから離れる彼らの姦淫の心と、偶像を慕う彼らの姦淫の目をわたしが打ち砕くからだ。彼らが自分たちのあらゆる忌みきらうべきことをしたその悪をみずからいとうようになるとき、彼らは、わたしが主であること、また、わたしがゆえもなくこのわざわいを彼らに下すと言ったのではないことを知ろう。

(エゼキエル 6・9～10)



## 放蕩息子ほうとうの試練

主が私たちの再生を願っておられることは、福音書の中でも、繰り返し語られています。そのことがもともと明白に表されているのは、有名な「放蕩息子ほうとうのたとえ」ではないでしょうか。数十年に渡る民族の壮大な喪失と回復の歴史であるエゼキエル書と比べて、短いたとえ話ではありますが、主のものを離れた人間が、信仰を取り戻すという意味で、両者のたどる道は非常によく似たものと言えます。

ある人に息子がふたりあった。弟が父に、「おとうさん。私に財産の分け前を下さい。」と言った。それで父は、身代をふたりに分けてやった。(ルカ 15・11～12)

この弟もまた、父の元で恵まれた暮らしをしていたのですが、その父の愛に背を向け、財産だけを受け

取って、外へ出て行きます。主なる神は、人間をプログラムされた機械のようにご自身のことばに従うものとして造ることもできたでしょう。しかし、主は、自由な意思を持つものとして私たちを創造されました。その結果、悪魔の声に耳を貸し罪人つみびととなってしまうました。その背景には、人が苦しみと再生の経験を通されることで初めて、自分に向けられた愛と恵みを真に理解できるといふみどころがあったのではないのでしょうか。

弟は財産を受け取ると、遠い国に旅立ちます。イスラエルの民が、捕囚の地へと連れ去られたように、息子も遠い国へと出てゆき、財産をすべて失ってしまいました。

何もかも使い果たしたあとで、その国に大ききんが起こり、彼は食べるにも困り始めた。それで、その国のある人のもとに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって、豚の世話させた。(ルカ 15・14～15)

彼が、飢えをしのぐために屈辱にまみれた生活をすることになったこの畑は、干からびた骨で埋め尽くされた谷間と同じく、主の愛から切り離されたたましいが、生きる希望を失って、滅びようとしている場所です。

弟の過ちとは、父に愛されている息子という立場を顧みかみなかつたことでした。主の愛の尊さを拒絶すること、それ自体が何よりも大きな罪であることを、イスラエルの民も放蕩息子も苦難を通して学ぶ必要がありました。そして、長い苦しみを経て、自分の犯した罪の大きさに気づいたとき、彼らの再生が始まりました。

## 新しい心

エゼキエル書に戻ります。神は、谷底に捨てられ干からびた骨に向かって語りかけます。

神である主はこれらの骨にこう仰せられる。見よ。わたしがおまえたちの中に息を吹き入れるので、おまえた

ちは生き返る。わたしがおまえたちに筋をつけ、肉を生じさせ、皮膚でおおい、おまえたちの中に息を与え、おまえたちが生き返るとき、おまえたちはわたしの主であることを知ろう。(エゼキエル 37・5～6)

神の息が吹き込まれると、骨はひとつに集まり、肉と皮膚が戻って歩き出しました。神への愛と信仰を取り戻した人間の再生が始まったのです。干からびた骨が新たに生かされるこの幻は、イエス様が乾ききった心に希望を与えて、新生を与えてくださった私たちの姿にも重なります。

エゼキエル書の終わりに近いこの章には、明確で力強いことばで国民の回復が宣言されています。

わたしがきよい水をあなたがたの上に振りかけるそのとき、あなたがたはすべての汚れからきよめられる。わたしはすべての偶像の汚れからあなたがたをきよめ、あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新し

再生の希望を与えられる主

い霊を授ける。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。

(エゼキエル 36・25～26)

民の心からは、神に背く石の心を取り除かれる必要がありました。人々の心は、自分の過ちに気づいたとき、きよめられました。それが、新しい霊、新しい心が与えられることばに表されています。

## 放蕩息子の再生

屈辱にまみれた生活をしていた放蕩息子のたましいも、干からびた骨のようになっていました。捕囚の民に對して、かつて、神は次のように告げられています。

その所であなたがたは、自分の身を汚した自分たちの行ないと、すべてのわざを思い起こし、自分たちの行なつたすべての悪のために、自分自身をいとうようにな

ろう。

(エゼキエル 20・43)

まさしくこのことが息子に起こり、自分の惨めな姿を認めた弟に、再生の機会が与えられます。

立つて、父のところに行つて、こう言おう。「おとうさん。私は天に對して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。雇い人のひとりにしてください。」

(ルカ 15・18～19)

全ての希望を失うことによって、人は、自分の身を汚した行ない、すなわち神の愛を拒んで、自分で選んだ道を歩いてきたことの罪を教えられます。私たちが神を拒み続けるとき、神は私たちをさばき、この世に見れば、光の途絶<sup>とだ</sup>えた闇の中へと放り出されます。しかし、神が本当に願つておられるのは、その苦しみした後で、悪の道を離れて生きること、すなわち、目をそ

らすことをやめて、神と正面から向かい合うことです。

暗闇の底に落とされた放蕩息子は、自分の罪を認め、谷底に横たわっていた骨と同じように、「立ち上がつて」光のもとに帰る旅路を歩みだしました。

息子は言った。「おとうさん。私は天に對して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。」(ルカ 15・21)

かつて神は、どれだけ罪を犯した民であつても、ご自身に立ち返つて生きるように望んでおられるかを、次のことばではつきりと宣言されました。

わたしは決して悪者の死を喜ばない。かえつて、悪者がその態度を悔い改めて、生きること喜び。悔い改めよ。悪の道から立ち返れ。(エゼキエル 33・11)

再生の希望を与えられる主

このことばに呼応するように、家に帰つてきた息子を受け止めた父親は言います。

「食べて祝おうではないか。この息子は、死んでいたのが生き返り、いなくなつていたのが見つかったのだから。」そして彼らは祝宴を始めた。(ルカ 15・23～24)

神がみもとに来るものを決して拒まず、回復への希望を誰にでも与えてくださること、そして、苦難の中にあつても、神がいつもそばにおられ、全てを与えようと待つておられることを、このふたつの物語、そして、聖書に記された、多くの再生の物語は伝えているのではないかと思います。

## イエス様が示された神の愛

捕囚の民と放蕩息子の通つた道を並行しながら見てきましたが、再生を受けた後の彼らの経験には、ひと

つの大きな違いがあり、ここに、イエス様が示される愛の性質が現れているのではないかと思います。

エゼキエル書の最後の部分を開くと、神が捕囚の民の回復を告げられた後、エルサレムに再建される神殿の設計図が子細しさいに示されています。その締めくくりに近い部分に、こうあります。

主は私に仰せられた。「この門は閉じたままにしておけ。あけてはならない。だれもここからはいつてはならない。イスラエルの神、主がここからはいられたからだ。これは閉じたままにしておかなければならない。」

(エゼキエル 44・2)

これが、この壮大な再生の物語の結末です。すなわち、捕囚から解放された民にとって、神は再び神殿の奥に隠れ、ただひたすらに恐れ尊ぶべき、手の届かない存在に戻りました。これに対し、人が自分の罪をみとめ、みもとに立ち返るとき、御子イエス様を遣つかわし

て、私たちの救いを成し遂げてくださった三位一体の神が行われることはどうでしょうか。

まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけ、かわいそうに思い、走り寄って彼を抱き、口づけした。

(ルカ 15・20)

息子の姿を見つけた父は、家の奥から走り出て、遠くにいた息子に駆け寄りました。

私たちが信じる神は、神殿の奥からひれ伏す人間を黙って見ているお方ではなく、悔い改めたものにご自身から走りよって、私たちの再生とともに喜んでくださる方であることが、ここに示されています。これが、主の福音の中に示された神の新しい愛のかたちです。そして、言うまでもなく、イエス様は、ご自身が十字架にかけられ、血を流すことによって、この本当の神の姿を伝えてくださったのです。

人の心を罰と恐怖で抑え込んでいた、律法の時代の

制度を拭ぬぐい去り、寛容と恵みをもった神の姿を伝えてくださったイエス様に、私たちは心から感謝したいと思います。

### 救いを拒む者たち

ところで、ルカの福音書15章の冒頭、人々がイエス様の話を聞こうと集まって来る中、パリサイ人、律法学者たちは、主が「罪人たちを受け入れて、食事までいっしょにする」とつぶやき、同じ席に加わることを拒絶しています。

エゼキエル書の最後の部分で、再建された神殿の中で神に仕える祭司の役割が細かく定められ、主に近づくのは彼らの特権とされました。彼らは、その立場を何世代にも渡って守り続けた結果、尊大な宗教家となって、真の神の愛を伝える役割を見失っていきます。パリサイ人とはこのように変容してしまった祭司たちの姿と重なります。

再生の希望を与えられる主

放蕩息子のたとえの終わりの部分、兄は、家に帰った弟を父親が迎え入れたことに憤慨してしまいます。

すると、兄はおこつて、家にはいろいろともしなかった。それで、父が出て来て、いろいろなだめてみた。

(ルカ 15・28)

兄は、弟と同じ真の救いを受けることを拒んでおり、自分にも悔い改めが必要であることを認めようとしません。

祭司やパリサイ人をはじめとする宗教家らは、地上に現れた神の御子であるイエス様を救い主と受け入れることができず、交わりを拒絶します。父親は、祭司やパリサイ人たちのこの姿を象徴している兄に対して、家から出て来て、語りかけます。

父は彼に言った。「おまえはいつも私といっしょにいる。私のものは、全部おまえのものだ。だがおまえの弟は、



死んでいたのが生き返って来たのだ。いなくなっていたのが見つかったのだから、楽しんで喜ぶのは当然ではないか。」

(ルカ 15・31～32)

イエス様は、家に入ろうとしない者、食事の席にくくことを拒んでいる人々も、ご自身との交わりに加わることを期待して、このことばで、たとえを終わらせたのではないのでしょうか。

## 再生の希望

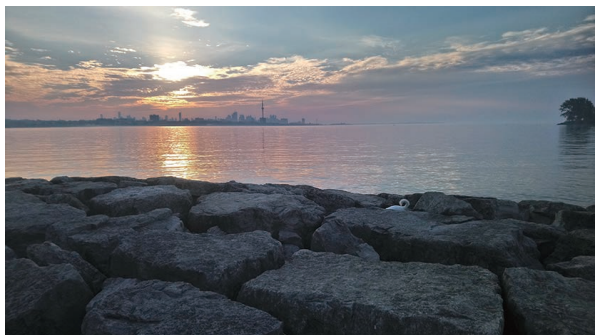
エゼキエル書と放蕩息子のとえを並行してみてきました。聖書に記されたたくさんの人々の経験を通して、人が生まれ変わることを、主なる神がどれだけ望んでおられるか、繰り返し示されています。しかし、ここで覚えるべきことは、神は決して、その新生を強制はされないということです。

放蕩息子が、飢えの苦しみの中で、ただ自分の運命

を呪い、または、罪の大きさにおののいて、父のもとに帰る気持ちにならなければ、谷底の骨のままで朽ち果てていたでしょう。実際には、苦しみの中で主に向き直ることをせず、あるいは、この世的な平安や成功に満足したままで、主の救いに気づかない人が非常に多いことを私たちは知っています。

主を拒んでいる家族、親戚、友人たちの救いを祈り、求めることが、私たち救われたものの使命ではないかと思えます。何年かかっても、その人が救いを受け入れてくれたとき、主は、戻ってきた放蕩息子を受け入れてくださったように、必ず、その再生をよるこんで、抱きとめてくれるはずです。全く相手からの手ごたえがなく、徒勞<sup>とらう</sup>でしかないと感じることがあっても、わずかな機会も逃さずに、みことばを伝え続けるように、私たちは召されているのではないのでしょうか。

佐藤 亮 (りょう) (北米集會)



再生の希望を与えられる主

# ひと足ひと足主にすがりて

前山 幸子<sup>ゆき</sup>



生前の幸子さん

（前山幸子姉妹は二〇二二年四月三十日に八十二歳で主のもとへ帰って行われました。これは二〇〇八年六月十五日、近江八幡集会の座談会での証しを、長女の近藤房子姉妹が文章に起こされていたのを再編集したものです）

私がなぜ救われたかというと、昔の苦しい時代の話になります。私自身は腕に障害がある身体障害者で、耳もよく聞こえませんが、そういう問題を抱えたままの状態で前山家に嫁ぎました。

主人も聴力障害者でしたので、夫婦はお互い弱い者同士、助け合って生活しておりました。ただ、主人の両親は、舅が石川県の電話局長で社会的に地位があるこの世的に「偉い人」でした。また、姑は息子には甘く、嫁の私に対しては相当厳しい人でした。

そんな生活の中で、家族といえども、結局つき詰めていくと、強い者と弱い者の関係になるんだなあと思われました。そして、いつも自分は弱い立場に立た

されていて、いろいろな矛盾に悩みました。そういう中で、どうしたらここから逃れられるかということ、あの頃は真剣に考えていました。

救いに導かれるきっかけはどうだったかと申しますと、主人の会社の上司だった方が、ご自分の行っておられる教会に誘ってくださったのです。とにかく人間的に良いことをしているという意識で、聖書を拾い読みしました。その教会で「きよめ」ということを強く言われたのですが、ピンときませんでした。人間的に良い人、罪を犯さない正しい行為を行う人がクリスチャンだ、というふうに間違って受け止めてしまつて、苦しみから何とかして逃れたかったのですが、もっと苦しくなりました。

そんな中で、近所に転勤してきた吉祥寺キリスト教会の方から『光よあれ』という証しの本を一冊頂いて、第一集だったと思うのですが、読みました。

## 6人の証し

Unser Herr lebt

その中であつた「自分で自分が分かっていない」ということばに目が留まり、「ああ、私もこの通りだ」と思いました。

何とかしてもっと聖書を知りたいと思いました。イエス様は「救い主」だとは分かっていたのですが、そのイエス様自体がハッキリ分かりません。罪のことはすぐに分かったのですが、罪から救われなければならないうところへたどり着くまで、時間がかかってしまいました。

ある時、主人が道で配られた伝道集会のトラクトをもらつて来ました。札幌から三橋萬利牧師（小兒麻痺で両足と右手の機能を失った伝道者）と幸子ご夫妻が、金沢へ福音伝道に来られたのです。

そのトラクトに「罪の問題が解決されないことには、救いはありません」ということが書いてありました。「この話を聞きたい！」と思ったのですが、当時、私は

嫁の立場だったので、自分勝手に「ちょっと行ってきます」と言っ出て出かけるわけにはいかなくて、それこそ、相当苦勞して家を出ました。

ほんとうに、聞きたいことがたくさんあって、集会のあと三橋夫人が時間を割いてくださっているいろいろお話ししました。「あなたは知識的には、いっぱい知っているけど、根本的な問題が分かっている」と言われました。それから聖書を創世記からずっと一緒に読んでくださって、解説してくださいました。

人間は罪を犯してしまったので、子羊や動物の犠牲を捧げなければいけない。それでイエス様の十字架が必要だった。罪が赦されるためには血が流されなければいけない。動物が殺されなければならない。それと、血を流すということは命の問題である。それから、神様が皮の衣を着せてくださった。

その時、その皮の衣という箇所が、頭の中でイエス様の十字架とパツとつながりました。動物を殺さなけ

れば、その皮を得ることができない。動物を殺してその皮の衣を、裸の状態ですらされたままエデンの園をさまよっているアダムとエバに着せてくださったという箇所が、自分の中で謎だった十字架に結びついたのです。皮を取るということは、命を犠牲にしなければできない。それでイエス様がその命を捨てて、犠牲になってくださった、と結びつきました。

今思うと、その瞬間に救われたのではないかと思えます。

それから、夜の伝道集会があったので、家へ飛んで帰って食事の用意をして、子ども達に食べさせて、上の子に、まだ小さい弟の子守りを頼み、おばあちゃん(姑)は、「行っておいで」という体制ではなかったのですが、とにかく何とかして出ることにしました。

当時は嫁が夜、外出するなど許されないことでしたが、行かなければならないという気持ちが強かったもので、とにかく家を出ました。玄関の戸を閉めた時に、

「心の決心の扉も閉めた！」と思って家を出ました。

その夜の伝道集会の時に、詩篇二十三篇の「私の杯は、あふれています。」という箇所が読まれたのです。その、「我が杯はあふれます」ということがどういうことか、それまでは一人で自己流の聖書の読み方をしているから、よくわからなかったのですが、でも、その時に瞬間的に、「ああ、あふれるってことは、いっぱいではないとあふれない。ああ、これは御霊の『満たし』のことだ」とわかりました。

その時から、あちらこちらを拾い読みしてきた聖書の部分が、心の中でどんどん繋がって行きました。そして冷静になって考えてみると、自分の置かれている立場や周りの状況を見て、ここはとても自分の力でたどり着けるような場所ではないなあと思われました。それで「自分は神様に扱われたんだな」と確信を持ちました。その印象はとても強く、今でも残っています。

それからは、私の場合、交わる人も手を引いてくれる人もいないし、教会で知り合いの人はいましたが、ちよつと信仰のピン트가合わなかったもので、証の本を讀んでから吉祥寺キリスト集会へ導かれるまでの間は、救われていながら、あやふやな信仰生活を過ごしておりました。

その後、長女の結婚を機に東京へ出る機会が増えたので、用事の前にまず吉祥寺集会へ行き、ベック兄のメッセージを聞いて、兄弟姉妹とお交わりいただくという、その道が今日まで続いています。

振り返ってみて、派手なパツとした喜びはなかったけれど、確実に「間違いない、間違いない」と確信を与えられて、この道を今日まで歩いてきたと思います。

息子はその内に救われて、だんだん信仰熱心になるし、長女も主人のお葬式の時以来どんどん熱心になって来て、今は、「ほんとうにこれでいいのかしら？」と



思うほど幸せです。

最近の悩みと言えば、平安でちょっと太り気味なことです。(笑)

これからもイエス様にお任せすることを第一にして、それを一途に生きていきたいと思っています。

イエス様にこのように扱われ、私は人間としていかに力がなくて、的外れだったかというのも見せつけられました。信仰も誰も教えてくれないし、ベックさんのメッセージテープ、「苦しみを平安に変える秘訣」や「私を呼べ」を何度も聞きました。

納得のいかない状態に置かれる飢え渴きを強く経験しているの、ベックさんのテープを聞くようになってから「ああそうだ、ああそうだ」と一つ一つ当てはまっていくのを心を感じる事ができて、幸せだと思いました。ああいう飢え渴きを経験したからこそ、こういう聖書の真理を知らされたのだろかなあと思います

害者となりました。また、中耳炎ちゅうじえんの治療中、母親が急逝したため、電車で通う治療が中断されてしまい、気がついたときには炎症が進んでいて難聴障害が残ってしまいました。

青年期は、金沢市内の紳士服洋裁店に住み込みで就職しました。勤め始めて三、四年たった頃に、縫製ほうせい仲間の会合で父と知り合い、結婚へと運ばれました。母の話では、「おぼっちゃま育ちで頼れるタイプではなかったけれど、思いやりがあり、障害者同士、引け目を感じることなく、心を通わせることができた」とのことでした。

父は三歳頃、三輪車ごと近所の泥川に落ちて赤痢菌せきりきんが耳についてしまい、命を取るか、聴力を取るかの選択を迫られ、中耳ちゅうじごと手術でえぐり取って命を助けられたそうです。現代では考えられない荒療治ですが、父の耳の裏側はペコンと凹へこんでいました。

祖母は、幼くしてそのような障害を負った息子を哀

した。

人間的に欠陥が多いから伝道に関してはなんの力もありません。石川県も因習が強い土地で全く歯が立たないので、相変わらず孤立している感じです。けれども主人が召されて葬儀の時、親族にも兄弟姉妹方にも「本当にいい葬儀だった」とおっしゃっていただき、夫の親族から迫害にも会うことなく「うらやましい」と言われて、今は幸せだなあと思っています。

#### 近藤房子姉妹による付記

母は昭和十四年に石川県能美郡のめぐんで、六人兄弟四番目の三女として生まれました。

小学校高学年の時、母親が脳溢血のういつけつで倒れ、幼少期の子供と乳飲み子を残して急逝きうせいしてしまいました。母(幸子)は、幼い頃のアクシデントにより、成長と共に左右の腕の長さに違いが生じて来ていましたが、満足な治療が出来ないまま関節が固まってしまい、身体障

れに思い、心配が高じて、母と婚約時代のデートについて来ることも何度かあったそうです。

私が大きくなってからも、生活面で干渉してくることが多くありました。「嫁は家を守り、姑に服従」という考え方が残っている時代で、祖母の母への態度は支配的でした。私の幼い記憶に、玄関の靴の脱ぎ方と脱ぐ位置が祖母の教える作法と違っていたので、「言いつけに従っていない」と怒って大騒ぎしていたこと、母のご飯茶碗にはいつもカピカピになった、お線香臭い、ご仏飯が下げられていたことなどが残っています。祖母とのかかわりは、母にとって大きな試練でしたが、その試練を通してイエス様の救いの恵みにあずかることができました。

二〇二〇年十月に、肺腺癌ステージ4で余命宣告を受けました。死の病が与えられる前は、「集会の人は病気になっても明るいけど、本当かなあと思うわ」

と言って、体の痛みや苦しみを恐れていた母でしたが、この時は、不思議と落ち着いていました。痛みを伴う苦しい検査の直後に「苦しい検査だったけど、検査中ずっと」にわかに起こる恐怖におびえるな…主があなたのわきにおられ、あなたの足がわなにかからないように、守ってくださいからだ」(箴言3・25〜26)のみことばが聞こえてきてイエス様を守ってくださった。房子、どんな時でも最後に残されるのは信仰だ」と確信を持って話してくれました。

検査の結果、副作用の強い抗がん剤治療には多少の効果しか望めないとのことで、高齢でもあり、自宅での看取りを目的とした緩和ケアを選択しました。緩和ケアを決心するまでは、治療方針で悩むことや多少不安がることはありましたが、落ち込む様子や死に対する悲愴感は一切なく、いつも神様に守られている様子でした。

また、ベック兄の「聖書と病氣―奇跡が起きるとき」

というメッセージを読んだ後に「病氣は主のご栄光を現すため与えられるのだとわかって嬉しかった！」とメールをくれて、病を通して主を仰ぎ、慰めと喜びを与えられている様子が伝わってきました。

彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、ご自身の使いが彼らを救った。その愛とあわれみによって主は彼らを贖い、昔からずっと、彼らを背負い、抱いて来られた。

(イザヤ 63・9)

ある時「房子、イエス様は見えないだろう」と突然申しまして、「私たちは今、毎日イエス様、イエス様と祈るだろう。けどイエス様は見えないの。イエス様は霊のお方だから、目には見えないの。でも、私たちがこの世での人生を全うして、天にあげられて、私たちのたましいがこの肉体を離れた瞬間に、バツと、イエス様が見えるようになるの。だから、うれしいの！素晴

らしいことやと思わんか！」と本当に嬉しそうにニコニコしておりました。

最後に母の手帳の表紙に書かれていたみことばを記します。

山々は主の御前に、ろうのように溶けた。

(詩篇 97・5)

前山 幸子 (まえやま ゆきこ)

二〇二一年四月三十日召天、享年八十二歳

夫 信雄 (二〇〇五年八月二十五日召天、六十八歳)

長男 忠陽 (ただあき)、妻 直美、長女 美月、長

男、陽一

長女 近藤 房子、夫 真生



# 私たちの転機とその後

國川 憲三



2013年、お孫さんたちと



2004年、雅子さんと  
(ドイツにて)

私と妻雅子(故)の四十年の信仰生活を振り返ってみると、主の恵みと憐れみで数知れぬ祝福がありました。その中で主の導きであり私たちの転機となった二つの出来事を感じつつ、その後のさらなる主の祝福を証します。

その後、神である主は、土地のちりて人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなった。  
(創世記 2・7)

神様は第一日から五日まで天地創造のみわざを成し遂げられました。その後、第六日に大切なみわざの人間を造られた祝福が記されています。

その後、彼らのうちのふたりがいなかのほうへ歩いていたおりに、イエスは別の姿で自分を現わされた。

(マルコ 16・12)

体調も回復し信仰も立ち直らせてくださったのでした。(詳細は『主は生きておられる』第5集に証しが掲載されています。)

## 第一の転機、知らない地に移されて、「その後」

私たち夫婦は生まれ育った関西から、何も知らない東京へ移る第一の転機が与えられました。「その後」の私たちの信仰生活も主の奇しい祝福に満たされました。

うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、…  
(ピリピ 3・13)

「お母さんは、このまま和歌山にいたらお父さんの帰りを待つだけの寂しい生活になるから、東京に来てくれたら私も介護の手助けをしたい」と優しい思いが娘の友美に与えられました。私たちには夢物語のように思われたのです。左手足が不自由でひとりでは何も出

イエス様は十字架に架かれ死なれて墓に葬られ、三日目によりがえられました。その後、多くの人々に復活の御姿を現わされて大きな栄光なるみわざをなさいました。これら旧約、新約聖書の二つのみことばのように、大きな出来事の後にも主の祝福の御わざが続いて成し遂げられたことを知って感謝です。

私たちは関西の和歌山で一九八〇年代に主イエス様に初めてお会いして二人はそれぞれ救われました。そして霊の渇きを覚えて、キリスト集會に導き入れられました。そこで真の喜びと祈りの真実を知るとともに、イエス様のみからだなる集會の一員として集會の皆さんとの親しいおつき合いをするように主は祝福してくださいました。

一九九九年一月、家内に卵巣がんがみつかり、その手術中に脳梗塞を発症するという大きな試練を与えられました。多くの集會の皆さんの祈りと励ましの中で、



来ないでしょうもない家内は、ビリビ人への手紙三章十三節のみことばを握って、和歌山を忘れ、東京に向かつて進むのだ、という確信が与えられました。大阪集会の最後の礼拝で集会の皆さんが聖歌五八四番「新しき地に」を賛美して私たちを東京へ送り出してくださいました。

主よ。…あなたが愛しておられる者が病気で。

(ヨハネ 11:3)

卵巣がんを発症し手術してから四年になって、もう大丈夫と思いましたが、二〇〇三年に再発し抗がん剤と副作用との長き闘いが始まりました。それは十年間、二〇一二年七月まで続きました。しかし、主がともにおられて家内の病床にはいつも平安と希望と喜びがありました。その時々には苦しい嘆きの時でしたが、主が慰め守ってくださいった日々でした。十年間の闘病で、

入院は十数回、抗がん剤治療は二十数回と、今思い出しても気が遠くなるような試練のときでした。しかし、いつも主がともに苦しんでくださいました。

あなたがたが信じて祈り求めるものなら、何でも与えられます。  
(マタイ 21:22)

がんが再発はしましたが、治療効果に恵まれて、私たちは車いす同伴で、二〇〇四年六月「ドイツ喜びの集い」に導かれました。

ドイツへの旅は、車いすのがん患者にとっては、はかない夢でありました。しかし、小さな願いから主への信仰の祈りを始めました。その結果は、絶対不可能と思えた旅を信仰によって、現実の喜びとなるように体験させてくださいました。一週間のドイツの旅は数々の試練と信仰の戦いがありましたが、みことばと賛美と祈りによって主はすべてを勝利にみちびかれて

祝福されました。「ドイツ喜びの集い」で天国のような日々を体験した私たちは、再び主が来られて本当の天国に迎えてくださることを熱心に祈るようになりました。

イエスは彼らに言われた。「わたしについて来なさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう。」

(マタイ 4:19)

「愛する主イエス様。私は弱く、貧しく何も出来ない者でみことばがなければ、今日も元気で喜ぶことができません。今からみことばを読みますから、どうぞ与えてください」と家内は祈ってからみことばを食べるようになり、この習慣を十三年間毎日、イエス様とともに続けることができました。そして、家内はみことばを三枚の紙に書いて、一枚は机の上に貼り、もう一枚はポケットに忍ばせて、最後の一枚は私に渡し、一日中ふたりはみことばに守られていました。

また、とりなしの祈りのノートは十数冊にもなって、

お会いした方々のお名前や、まだお会いしていない人も含めて千名以上になっていました。残った住所録は今でも活用しています。また、イエス様の愛と恵みをお伝えする便りを一日五通ほど相手の方の幸せだけを祈りながら書きました。そうすると祝福に満ち溢れた返事の便りが届けられて、さらに祈りの実現を体験しました。また、動かせる右手を最大限に活用して、新しいことにもチャレンジしました。手紙より速くみことばと祈りの課題を伝えたいときは、娘が買ってくれた携帯電話のEメールを用いるようになったのです。また、みことばと同じように賛美の歌詞を繰り返し味わっているうちに、電話や会話の時にグッドタイミングに賛美が導かれています。賛美は直接心に働いて心をやわらかくしてイエス様の所へつれていく働きがあることを実感しました。

あの日の大きな試練を通して私たちの心は砕かれて、

自分の弱さと罪深さを徹底的に知って、自分を捨て、ただイエス様に従って、日々主を証しする者へと変えられていきました。

そして、礼拝、祈り会、家庭集会や豊橋、大阪、御代田での「喜びの集い」にいつもふたりで参加することができ、そこに参加された方々との語らいの中でイエス様を証しする喜びが与えられていました。

私たちとしては、どうすればよいかわかりませんが、あなたに私たちの目を注ぐのみです。

(2 歴代誌 20・12)

二〇一二年六月二十四日、家内は、突然悪寒発熱<sup>おかん</sup>があつて、救急車で武蔵野日赤の救急センターに搬送されて緊急入院となりました。悪寒発熱の原因は胆管ドレナージ管が詰まっていたために胆肝炎になったとのことでした。すべては主から与えられて主のみこころ

生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです。  
(ローマ 14・8)

家内は十三年七か月の闘病と六十三歳十か月の人生の旅路を終えて、二〇一二年七月二十六日午前四時に天の故郷に凱旋しました。最後の二週間は緩和ケア病院にて過ごし、最後の日は何の痛みや苦しみもなく安らかにして、家族三人に見送られて天に召されました。今や天にてイエス様と先に逝った両親や弟と憩い安らいでいることを感謝します。天国で会いましょうね！

## 第二の転機、やもめになって、「その後」

家内雅子が召されて、やもめになったことが私の第二の転機となりました。「その後」、私の信仰生活も主が大いに変えられ祝福されています

ほんとうのやもめで、身寄りのない人は、望みを神に

通りにしてくださいることを信じて感謝していました。病室でふたりでみことば集『日々の光』を読んで感謝し祈りました。

七月六日入院十二日目、主治医との面談は大きな決断の時となりました。リスクを覚悟して治療を続けるか、穏やかにして自宅療養するかでした。雅子も静かに聞いていました。それでイザヤ書四三章十九節のみことばをいただきました。十三年にわたる治療の道を終えて、さらに厳しい荒野に新しい道、自宅療養の道を設けてくださる約束をにぎりしめていました。私たちはすべてをイエス様から与えられたことと信じました。

見よ。わたしは新しい事をする。今、もうそれが起ころうとしている。あなたがたは、それを知らないのか。確かに、わたしは荒野に道を、荒地に川を設ける。

(イザヤ 43・19)

置いて、昼も夜も、絶えず神に願いと祈りをささげていますが、自堕落<sup>じだらく</sup>な生活をしているやもめは、生きてはいても、もう死んだ者なのです。(1 テモテ 5・5〜6)

四十年連れ添っていつもふたりであった暮らしが男やもめになりました。悲しく孤独になったことは言うまでもありません。特にその数年前の暮らしは介護生活に必死でしたので、その落差は非常に大きかったです。それは想定外の孤独さでしたが、一方で自由さでもありました。自分の時間が倍以上になって、なんでも自由にできることでした。しかし、その自由の楽しさは一時のことで、心に穴が空いて、虚しく、淋しさの方が大きくなりました。世の中では高齢になって連れ合いに先立たれた人は、特に夫の方が孤独感と何もやることがないことで心の病になってしまう人が少なくないと言われています。しかし、こんな男やもめの私をも神さまは守り支えてくださいました。具体的には

## 6人の証し

Unser Herr lebt

みことばを求める渇く気持ちを与えられたこと、礼拝や集会に集い十字架と復活の初めの信仰に戻れたこと、多くの集会の方とおつき合ひの中で励まされたこと、そして天の御国で家内と再会できる確信が深まったこととで淋しさと孤独感は過ぎ去りました。

自由になったと世の快樂におぼれたり、淋しさに落ち込んで心病んでしまわなかったのも、私にはイエス様があるから守り支えられたのです。集会での奉仕に喜んで励んでいることもその後の主の大きな恵みです。

それまでは介護のために時間がとれなくて、集会の奉仕はできなかったのですが、ひとりとなって自由に時間を使えるようになって、主は集会の奉仕を与え主にあつて活気ある喜びのほんとうのやもめになりつつあります。

私たちは、与えられた恵みに従って、異なった賜物を持っているので、もしそれが預言であれば、その信仰に

子どもたちよ。主にあつて両親に従いなさい。これは正しいことだからです。

父たちよ。あなたがたも、子どもをおこらせてはいけません。  
(エペソ 6:1、4)

家内が召されて早や十年になりました。そしてひとり寂しいやもめ暮らしから、孫たちと同居して五年になりました。いろんな面で親と子の意見が異なりぶつかりがあつて問題が起こつてきました。さらに、信仰に関することで、娘の意見と違うことが起こされて主に祈り求めました。ある集会の方のご意見は、娘との生活を大切にするようにとのことでした。おやじ風を吹かせ自分に従わせようとするのではなく、主にある父親として実際の行動で証しし、みことばを以つて示すようにと主から戒められたことを感謝しています。

同居は、娘家族がイエス様にもっと近づけられ救われるようにと私が願つて始めたものですが、実際は、

応じて預言しなさい。奉仕であれば奉仕し、教える人であれば教えなさい。  
(ローマ 12:6、7)

前の教会では奉仕に疲れて嫌になりました。半強制的な奉仕を自力でやってしまったため、霊が満たされず喜びがなくなつたのでした。また今までの経験や得意な専門をもつて奉仕しようとして高慢になつたこともありました。奉仕のことを全く分かつていない者でした。今回も時間が空いたからというのではなく、主が私の信仰の訓練のために新しい奉仕を準備してくださつたのだと感謝しています。全くのしろうとでしたが、IT関係でパソコンを使うことに興味を与えられ集会で用いられています。これまで多くの問題がありましたが、主は技術的なことでなく、魂の闘いを通して解決してくださいました。この奉仕によつて私の信仰は強められ聖められていると感謝しています。

第一に父親の私が自我を砕かれ仕える者にされるためであつたと主のみこころが示されて感謝しています。家族みんなが救われて集会に集う日を信じて祈り続けます。

すべてのことが、神から発し、神によつて成り、神に至るからです。  
(ローマ 11:36)

二〇二〇年から始まつたコロナ禍の毎日の生活は自粛生活で戸惑い憂鬱ゆううつになつて喜びと平安を失いかけていました。なぜこのように全世界に非常事態パンデミックを起こさせるのかと主に問うていました。しかし、ローマ十一章三六節のみことばが、あるとき与えられました。「すべてのこと」、「この世に起こるすべての事の中に、コロナ感染事態も含まれているのです。そしてその収束結末も、神様のみこころに至るのですと受け取ることができたのです。すなわちコロナ感染も



禍でなく主からの恵みであると感謝できるようになっています。

その恵みの一つ目は、祈りの重要さをかみしめ、集会に集えなくとも絶えず忍耐をもって祈る事ができる自肅信仰生活です。集会のある医師の方が医療崩壊の危機的状态で、「どうすることもできないです、ただ主に祈るだけです」と言われたことは、つぶやきではなく、主にある恵みと希望を証しされていたのです。恵みの二つ目は、主が与えてくださったITのツールをこの時とばかり感謝して活用しています。ユーチューブもズームもこんなに身近に活用できるようになったことを感謝しています。最後の三つ目の恵みは、信仰四十年のときを前に、荒野の終わりをまとめようとしていることです。後期高齢者となり、信仰四十年の恵みの荒野を歩んできた証し『日々の光を映して』をまとめて小冊子にして、特に四人の孫たちに残したいとの願いを与えられています。

國川憲三（くにかわけんぞう）

一九四六年、三重県志島<sup>しじま</sup>に生まれる。鷗方<sup>うがた</sup>小学校、文岡中学校、松阪工高、大阪府立大学卒、二〇〇三年花王（株）退社

妻 雅子（二〇一二年召天）

一九四八年、和歌山県桃山に生まれる。雑賀<sup>さいか</sup>小学校、西浜中学校、桐蔭高校、大阪女子大学卒

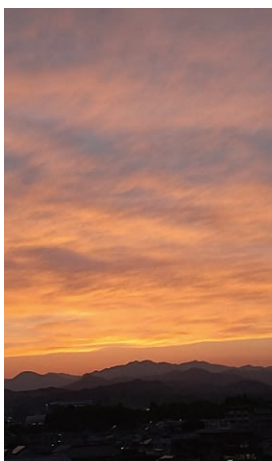
長女 友美（夫 石田誠、孫 海斗、美海）

長男 憲明（妻 瞳、孫 啓人、翔輝）掛川在住

以上、私たちの信仰の二つの転機を振り返って、「その後」の主の祝福を証しさせていただきました。

二つの転機は主が起こされたこと、その後の祝福も主のみこころ通り成し遂げられたことを感謝しています。

すべては主からの恵みであり、私の信仰成長のため、家族の救いのため、集会に集うため、日々新たに主を証しするために生かされていることを感謝しています。その後、私たちもこの地上に生かされるかぎり、天の御国を待ち望んで主の時がくるまで、主のみこころとみことばに忠実に従い歩み通したい、と願い祈っています。



# みことばのすべてはあみことば

黒津 君子

わたしは彼らにあなたのみことばを与えました。

(ヨハネ 17・14)

真理によって彼らを聖め別つてください。あなたのみことばは真理です。  
(ヨハネ 17・17)

日々押し寄せて来る苦しみ悩みに打ちひしがれ、先の光がまったく見えない真つ暗闇を歩いていた四十五歳の時、ようやくイエス様の呼びかけに耳を傾けることができ、救われました。

イエス様はずっと声をかけ続けておられたのに、まったく気がつきませんでした。救われた時から、今日に至るまで、イエス様は、聖書の「あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。」(詩篇 119・105)のとおり、みことばの光をもって、足元を照らし、慰め励まし、時に罪に光を当て、悔い改めを促しつつ、真実と誠をもって、一歩一歩導いてくださっています。



左から、君子さん、母 喜久子さん、暁美さん、郷美さん

## イエス様の呼びかけ

四、五歳の頃、気が強く、わがままな私の将来が心配になったのか、母は『心を清くする話』という本を買ってきて、よく読んでくれました。この世に生きている時に犯した罪のすべてが、死後に神様によって、再現して見せられ厳しい罰を受けるという短編集で、人間の心にある罪の本質とそのすべてを見ていてさばく方がおられると教える本でした。私が、目には見えないが、神様という方がおられると知った最初の体験でした。

小学校に入学すると、母は私を日曜学校に連れて行きました。毎週聞いたであろう「みことば」は何ひとつ記憶にありませんが、霊は養われていたと思います。

学校はミッション系でしたので、礼拝堂がありました。心が何か満たされず、虚しい時に訪れ、歌われる賛美に慰められたことを思い出します。

婚家の母はクリスチャンで、家のあちこちに「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。」(ヨハネ 14・

6)のみことばが書かれたお皿が掛けてありました。毎日、目にするうち、そのみことばが徐々に心に染み入ってきました。

子育てに不安を覚えて、一九六九年、神様に頼りたいと母の教会に連れて行ってもらいました。その教会は、聖書はまったく読まず、牧師先生の書かれた聖書解説書を皆で輪読し、週に一、二回はそこで出される冊子を持って、各家庭を訪問して回るのです。二十年間続けました。今思えば、イエス様不在の教会でした。やがて、この教会のあり方に疑問を持った数人の姉妹方が、真のイエス様をご臨在され、祝福あふれるこの吉祥寺キリスト教会に移って行かれました。この姉妹方は、教会に残っていてまったく目が閉ざされている私たちの為に、必死で祈ってくださいました。

一九八九年三月末、私は二十年の荒野での放浪の末、ようやく救い主なるイエス様の牧場にたどりつきました。しかし、喜びもつかの間、その一週間後の四月初め、

## 6人の証し

Unser Herr lebt

胸のしこりに気がつき、乳がんとの診断を受けました。信仰に導かれてはいても、イエス様がどの様なお方なのかまったく分からない者でしたので、「がん」という死の恐怖を思わせる病名に怯えましたが、不安げに見つめる娘たちに心の内を見せることはできず、ただ心の動揺を取りつくりうので精一杯でした。でもその思い煩いは無用でした。集会でのベックさんとお交わり、そして各地の家庭集会への参加、自分の心の内を覗く暇を与えないかのように、恵みにつぐ恵みの嵐でした。入院中も、みことばと祈りで取り囲まれ、手術当日にも多くの姉妹方が病室で祈り、支えてくださいました。病が与えられた時には、すでに主イエス様の牧場に導かれているという万全の備えの守りの中に置かれていました。

一九八九年十二月二十四日、吉祥寺キリスト集会场で、娘二人と共に受洗の恵みにあずかりました。

それからの信仰の歩みの中で、主は私の根深い罪に光を当てられました。対人関係の苦しみ、悲しみは、自分が一方的被害者で非は相手にあると思い込み、自己弁護と自己憐憫ばかりでした。

ある朝、旧約聖書を読んでいると、そこにはある王様の記事が書かれていました。その王は、自分の犯した大罪を棚にあげて、他の人の犯した罪に怒りを燃やし、「そんなことをした男は死刑だ」と声を荒げます。すると王の前にいた預言者が「その男こそ、あなたです」と王を断罪する場面です。これを読んでいた時、「それは他でもない。あなたのことだ」と主からの突然の啓示。「そうだ。自分の犯した罪は棚にあげ、他人をさばく、これは私のことだ」。私の心の闇に、主の鋭い光が差し込んだ瞬間でした。主が十字架で、身代わりに死んで、私の罪を贖ってくださったならなければ、とても赦されるものではないと、涙があふれました。長い間、気付くことなくかかえていた大きな罪を教えて赦して

くださった主のご愛とあわれみに、深く感謝しました。

今、あなたがたは主を恐れ、誠実と真実をもつて主に仕えなさい。あなたがたの先祖たちが川の向こう、およびエジプトで仕えた神々を除き去り、主に仕えなさい。

(ヨシヤ 24・14)

私がいつもイエス様からいただいている戒めのみことばです。

## 家族への恵み

父は、一九九七年より、月一回の春日部集会へ私と共に集うようになりました。耳が遠いので語られるメッセージは聞き取りにくいようでしたが、共に歌う賛美や引用される聖書のみことばに心深く引かれているようでした。集会の重田兄の著書『私たちはキリストに会った』が愛読書でした。

集い始めて四年目の二〇〇一年八月、山に登って雨に降られたのが原因で肺炎となり入院しました。肺炎は程なく治りましたが、検査の結果、左肺にかなり大きな腫瘍が見つかりました。すぐに柏市にある国立がんセンターを紹介され、約一か月の検査通院が始まりました。結果は、父の希望で、弟と三人で説明を受けました。左肺のがんはかなり大きく、リンパにも転移し、右肺にも小さいものが多数あるので、病状は厳しく、選択肢として、一つは抗がん剤治療を受ける、もう一つは、痛みや呼吸困難を和らげる緩和ケアを受けるかのどちらかですと、告げられました。

父は動揺することなく、淡々とすべてを受け入れ、迷わず緩和ケアを希望しました。それからの父は間近に迫りくる死を意識し、聖書のみことばに頼り支えられた日々であつたと思います。

苦難の日にはわたしを呼び求めよ。わたしはあなた

## 6人の証し

Unser Herr lebt



を助け出そう。あなたはわたしをあがめよう。

(詩篇 50・15)

父の傍<sup>かたわ</sup>らにはいつも聖書がありました。

二〇〇一年十一月、私は娘たちと御代田の福音センターでの「喜びのコンサート」に行くことになりました。父の郷里に近いこともあって、コンサートにさそいますと「是非行きたい」と大変嬉しそうな返事でした。身体具合が悪くなり、故郷には二度と帰れないと残念に思っていたところだと言いました。

十一月一日、御代田に着き、九十三歳になる父の兄や甥<sup>おい</sup>、幼な友だち数人、皆に会えました。子供の頃の遊び場の千曲川や抜けるような青空に映える浅間山も、千曲川に架かる中津橋の上から見ました。センターに着くなり「もう思い残すことはない」と晴れやかで曇りのない顔でした。早速ベックさんに御挨拶すると「お父さん、洗礼の証しまだでしたね？」戸惑う父に

になり、駆けつけた家族との暫<sup>しば</sup>しのひとときを楽しむことができました。九日の朝、「みことばカレンダー」をそばでめくっていたら、「今日は？」と言うので渡すと、しつかり、ゆつくり、かみしめる様にみことばを読んだ「ほう」とうなずいていました。

私は切なる思いで主を待ち望んだ。主は、私のほうに身を傾け、私の叫びをお聞きになり、私を滅びの穴から、泥沼から、引き上げてくださった。そして私の足を巖の上に置き、私の歩みを確かにされた。

(詩篇 40・1、2)

だが、今、ヤコブよ。あなたを造り出した方、主はこう仰せられる。イスラエルよ。あなたを形造った方、主はこう仰せられる。「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。」

「洗礼の証しをする資格がないと思う人こそ、資格があるんですよ」と、ベックさんの優しい声が響きました。三時間のコンサートの間、父の心の中をどの様な思いが心に去来<sup>きょらい</sup>したのか分かりませんが、コンサートが終わった時、はつきり洗礼の証しをしようと、申し込み書に名前を書き入れました。

十一月十一日、多くの集会の皆さんと当時ドイツから来られていたシュベスター(ドイツ語で、主なる神に仕えるため生涯を捧げている女性のキリスト者たちのこと)さん方に見守られ、祝福いっぱいのお祈りの中、受洗の恵みにあずかりました。孫である郷美と暁美がみことばを拝読し、娘である私が感謝のお祈りをお捧げするという真に至福のひとつとなりました。

二〇〇二年一月、がんは背骨に転移し、痛みをとる為の放射線治療中の二月五日早朝、突然呼吸困難になり、がんセンターホスピスに緊急入院しました。体力が弱り発症した肺炎でした。モルヒネ投与で呼吸が楽

あなたが水の中を過ぎるときも、わたしはあなたとともにおり、川を渡る時も、あなたは押し流されな  
い。火の中を歩いても、あなたは焼かれず、炎はあなたに燃えつかない。…」  
(イザヤ 43・1、2)

二月十五日早朝、数日間目を覚<sup>さ</sup>すことなく眠り続いていた父が、突然目を開け、にこっと嬉しそうにほえみました。「あっ！ おじいちゃんが笑った」と皆が叫んだその時、脈をとっていた弟が、「あっ！ 脈が止まった」と声をあげました。父が、迎えに来てくださったイエス様を大喜びでお迎えし、天国に携えあげられたとわかりました。部屋いっぱい感謝が満ちました。葬儀はベックさんの司式で、集会の方々の助けをい  
ただいて、地元で行うことができ、福音をお伝えできる場として用いていただきました。

父の最期の脈をとった弟は、小さい頃より人付き  
あいが苦手で、いつもひとり部屋に居ることが多く、

外界との接触を避けていました。心に何か深い傷をかかえていたようで、両親や姉である私とも心を通わせることはありませんでした。父の仕事の手伝いで一日数回、配達のために外に出る以外は部屋に籠もり切りでした。優しく穏やかな性格でしたので、小鳥や猫、犬にはとても好かれていました。姪たちには心を許し、部屋に入れ、話していました。

父がホスピスに入院し、召天が間近に迫っていることが現実になったとき、弟は、今まで父の背中に守られて人との接触も持たずに生活して来られていたが、これからは世間の矢面に一人で立ち、一度も携わったことのない稼業の店と年老いた母が残されていくという事態に、底知れぬ絶望の淵へ沈み込んでいくような恐怖に襲われたことでしょう。途方に暮れるばかりの弟でした。

しかし、主には備えがありました。入院を聞きつけた集会の方が早速病院に駆けつけてくれました。お交

のみことばを引用されました。

二〇一〇年十二月、弟と暮らしていた母が体調を崩したのを機に我が家に来ることになり、弟のひとり暮らしが始まりました。心細かったのかもしれませんが。学び会、礼拝のメッセージCD、集会の出版物、日曜学校のみことばカード等、いつも、とても楽しそうに待っていました。

二〇一四年末、突然弟から、「明日、柏市の国立がんセンターに来て欲しい」と電話がありました。医者から、家族も一緒に話があると言われたとのことでした。当日、先生には、私たちはイエス様に対する信仰があるので、すべてを包み隠さず、お話しくださるようお願いしました。先生からは、胆のう・胆管がん、リンパにも多数転移していて、何もしなければ三か月、抗がん剤治療を受ければ五か月から八か月というお話でした。静かに聞いていた弟は、その場で、緩和ケアを申し出ましたが、先生からは「君はまだ若いし、他

わり、賛美、お祈り、弟にとってはすべてが初めての経験で、乾ききった砂漠のような心に水がすつと吸い込まれるかのごとく、弟は瞬時に救われたのだと思います。集会の賛美集『日々の歌』一五六番「主イエスのみそばに、したい寄れば、罪は赦され、安らぎを得る…」を大きな声で、あふれる笑顔で歌っていました。父も「亮一もこちらに傾いてきたね」と安心したようでした。

瞬く間に天に喜んで迎えられて行った父は、弟の信仰を確かなものとする真の証し人でした。葬儀後、弟はすぐに店をたたみ、少しずつ諸々から解放されていき、六月には母と姪二人、私と弟の五人でミヘルスベルクの「喜びの集い」に行くことができました。ベックさんはドイツの方々に、弟を「お父さんが一粒の麦として召され、生まれた兄弟です」と紹介してください、「まことに、まことに、あなたがたに告げます。一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。」(ヨハネ12:24)

の臓器には転移がないので」と抗がん剤治療を勧めてくださり、それを受けることになりました。がんセンターの帰り、自分の家に来て部屋を見て欲しいと言われました。私は四十年以上も弟の部屋には入っていませんでしたが、ドアを開けて、衝撃を受けました。居間には、ソファとテーブル、CDプレーヤーが載った本棚、本は一冊もありませんでした。そして聖書とみことば集『日々の光』と賛美集『日々の歌』が整然と置かれた机が片隅にありました。テレビ、ラジオ等、何ひとつない清らかな空間だけがありました。自分の病状は良く分かっていたのでしょう。天国行きの準備は完璧に整っていました。

その後がんは小さくなり、日常生活を何とか送ることができていましたが、二〇一六年十二月に急変し、医者からは「緩和ケアに入りました」とのお話でした。以前がんの末期を知らされた時、ベックさんに御相談し、聖ヨハネ桜町病院のホスピスを予約していました

ので、急きょ入院することができました。ホスピスには、多くの集会の皆さんが訪れてくださり、お交わり、賛美、お祈りをいただき、地上に居ながらにして、まるで天国のようでした。みことばカードもたくさんいただき、部屋に飾り切れない程でした、弟は賛美がとても好きで『日々の歌』十四番「感謝します、この恵みに。主イエスが下さる贈り物に：」や二二二番「いつかはこの世の重荷を降ろして、主イエスの御国に安らうしあわせ」をよくリクエストしていました。好きなみことばは「あなたの重荷を主にゆだねよ。主は、あなたのことを心配してくださる。主は決して、正しい者がゆるがされるようにはなさらない」(詩篇55・22)。

二月二十六日、イエス様の御もとに迎えていただきました。

この弟の病、召天を通し、更にイエス様は恵みを用意してくださっていました。私たち家族は、今ある事情により、主人と離れて暮らしています。夫は教会に

通う母の元で育ち、聖書は知っていますが、今はまったくかけ離れた所にいます。その主人が時折、ホスピスの弟を見舞いに訪れ、弟を通して流れ出るイエス様の御愛を感じていたようです。置いてあるカードを見たり、声を出して読んだりしていたそうです。

「わたしはほんのしばらくの間、あなたを見捨てたが、大きなあわれみをもって、あなたを集める。怒りがあふれて、ほんのしばらく、わたしの顔をあなたから隠したが、永遠に変わらぬ愛をもって、あなたをあわれむ。」とあなたを贖<sup>あがな</sup>う主は仰せられる。

(イザヤ 54・7、8)

娘共々、いつも主人の救いの時を確信して祈っています。

見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんと

いうしあわせ、なんとという楽しさであろう。

それはまたシオンの山々におけるヘルモンの露にも似ている。主がそこにとこしえのいのちの祝福を命じられたからである。

(詩篇 133・1、3)

黒津君子(くろつ きみこ)

一九四三年千葉県野田市生れ、野田市立中央小学校、野田市立第二中学校、千葉県立東葛飾高等学校、青山学院大学英米文学科

長女 郷美(さとみ)

次女 暁美(あけみ)

母 石村 喜久子

父 石村 房之助(召天)

弟 石村 亮一(召天)





## 主、我<sup>われ</sup>を愛す

平井成子

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。

(1テサロニケ 5:16-18)

イエス様が私を見捨てず、導き続けて下さっているご愛を思い、お証しいたします。

吉祥寺キリスト集會に導いていただく前のことですが、二〇〇七年、主人は定年退職し、しばらくして大きな試練が訪れました。青梅市内の病院では治療できないほどの大ケガをして、埼玉の大病院に民間の救急車で転院しました。ようやく手術が出来る状態になったの手術は成功しましたが、手術後の経過が悪く、苦しむ日が続きました。

病室はまるで理科の実験室のような雰囲気、大小の器具がいくつも備えられて、身体<sup>からだ</sup>には管がつけられ、まったく自由のない姿です。治療の苦しみにおける大



左から2人目が成子さん、集會の皆さんと

声は皆さんに平井さんの雄<sup>お</sup>叫<sup>けい</sup>びと言われ、私は聞こえない所へ逃げこみました。

毎日、主人のことだけを思い、必死の病院通いでした。ある日、いつものように私が主人のところに行くと、主人は暗い顔して私を待ち続けていたようで、私を見るなり、「地獄の夢を見た」と泣きました。「こわかった」と泣きました。その時私は、とっさに自分でも驚くほど落ち着いていて、しっかりと、「大丈夫よ。神様が守って下さる。神様に助けていただきましょう」と言うことができたのです。うちひしがれた主人を前にして、なぜ私がそのように言えたのか神様が私の身体に、しっかりと柱を立てて下さったような、力を与えて下さったのだと、今振り返って思うのです。

### 幼い頃のこと

私は一九四一年、東京都豊島区に姉二人、兄二人、弟、妹の七人兄弟の三女として生まれました。一人一人が

個性豊かだにぎやかな家族の中、私はおとなしく、いるかいけないかわからないと言われて育ちましたが、風邪もひかないような丈夫な身体に恵まれ、明るく元気で好奇心旺盛な子供でした。生まれた家は終戦の年の東京大空襲で無くなってしまう、戦後は、五歳の時に国立に住むことになりました。

幼少時より母に神様のことを教えられました。私たちの目には決して見えないけれど神様は私たちのことをご存じで、どこにいても何をしていてもすべてを見ていらっしやると聞いて、子ども心に空を見上げたり、天井を見ては神様の目を探しておりました。

国立の家で母は家事をしながら、賛美歌の「主、我を愛す」をよく歌っておりました。母と二人の姉と賛美歌を歌う時はとても嬉しかったです。母に「求めよ、さらば与えられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩<sup>たた</sup>け、さらば開かれん。」(マタイ7:7、文語訳)などのみことばを教えてもらいました。

### 6人の証し

Unser Herr lebt

小学四年のとき、友人に誘われて、幼稚園を借りて

(創世記 21:22)

行われていた日曜学校に行きました。イエス様のお話はすばらしくて夢中で聞きました。お話が終わると並んで一人ずつ、みことばを暗誦(あんしゅう)します。暗誦しますと新しいみことばカードをいただけます。みことばカードを下さるのは金髪(きんぱつ)の青い目の美しい宣教師の方でした。お話はなさいませんでした。ニコツと笑顔で渡して下さるのです。嬉しくて嬉しくて一生懸命暗誦しました。クリスマス会では東方の三博士のお役を頂いたことも忘れることができません。

初めに、ことばがあつた。ことばは神とともにあつた。

ことばは神であつた。

ことばは人となつて、私たちの間に住まわれた。

(ヨハネ 1:1、14)

あなたが何をして、神はあなたとともにおられる。

声にすることはできませんでした。学校でこんなことが起きていると知ったらどうなるでしょう。我家の平和を乱すことは出来ないと思いました。

こんな事もありました。教室に入ろうとしますと体格の良いO君が私の鞆(かばん)を傷つけているのが見えました。とっさのことですがこわくなって逃げました。牛皮の鞆は深い曲線の傷がつけられておりました。O君のお父様は戦死されたと知ったばかりの出来事で、帰り道、入学祝い(ご入学祝い)の大切な鞆を抱きしめながらO君のことを考えていました。私の生まれた家は東京大空襲で無くなつてしまいましたが、母と子供たちは疎開し、家を守っていた父と祖母も命を失うことはありませんでした。O君が歯をくいしばって傷をつけている姿を忘れることは出来ません。学校でも家でも鞆の傷を悟られない工夫をしたのです。

「行つてまいります」という私に母は、「どうしたの! そんな顔で学校に行つてはいけません。鏡で見て

中学入学を楽しみにしていました。姉、兄達に続いて四番目の入学の私を先生方はどんな子かと思われて比較されたり、えこひいきされたりしましたから覚悟が必要と感じました。はじめての学年一斉テストが終わつてまもなく、授業の始まる前に、ある先生が生徒の前で私の兄のことをほめて下さったことがありました。

そのことがあつてまもなく、男子生徒数人が私に辛い言葉や態度をするようになりました。私物を隠されたり、椅子をひいて転ばせようとされました。それと合わせるように女子の誰かが、私がカンニングをしたという噂(うわさ)を広めました。私はどうして良いかわかりません。ただただ、されるまま、言われるままに耐え続けておりました。「お父さん、お母さん、私を転校させて下さい。」と何度も心の中で叫ぶのですが、どうしても

から行きなさい」と優しくも厳しい母でした。母の教えは、「笑顔で、誰とでも仲良く、何をされてもやり返してはいけません」でした。そのためか心の葛藤を覚えつつも、両親にも、家族の誰にも、先生にも、友人にも苦しみを言うことはできませんでした。「神様助けて下さい。神様助けて下さい」といつも心の中で叫び続けておりました。

自分にしてもらいたいと望むとおり、人にもそのようにしなさい。  
(ルカ 6:31)

神様は逃げ場を与えて下さいました。学校では機会があれば図書室へ、下校して家に帰れば図書館へ逃げ込んでおりました。図書館の入口にある百日紅(さるすべり)のつるした木肌(きだ)をなでて、「さるすべりさん、こんにちは」と声をかけますとサラサラと葉を揺らしてくれま

象ですが、ある日、「お父様はお元氣ですか？」と笑顔で声をかけて下さったので嬉しくなりました。図書館では少年少女文学全集の類の世界に逃げ込んでおりました。

神は、どのような苦しみのときにも、私たちを慰めてくださいます。  
(2コリント 1:4)

学校での規律は守り、一日も欠席せずに登校しましたが、高校受験に集中できなかった中学生生活、合格できなかったらどうしようと、不安な気持ちでたった一人、発表を待ちました。受験番号を見つけた時、張り詰めていた思いがはじめて涙となりました。神様のあわれみに感謝しました。

高校生になって、となりの席のYさんが教会に集っておりしました。私が教会に行く様になったことを知った兄は、「この本を読むと良いよ」と内村鑑三の本を大

学の図書館で借りてきてくれました。

私と呼んだその日に、あなたは私に答え、私のたましいに力を与えて強くされました。  
(詩篇 138:3)

主人の病を通して

時は過ぎて、二十八歳の時、私の父の友人の紹介で主人と会いました。話の中で主人は高校生の時に牧師さんの息子さんと友達になって教会に行くようになったことを知りました。「神様を信じています」と嬉しそうに言いました。音楽が好きで神様を信じている人、それだけで充分と思え、結婚を決めました。主人は優しい人でした。「けんかは止めようね。明るい家庭にしようね」と言ってくれたことは生涯守られました。

私は友人に誘われて聖書の学び会、教会の音楽会やクリスマス会などには行きましたが、主人も私も神様を信じているというひそかな思いだけで信仰生活とは

言えないような平凡な生活をしていました。

そのような中、突然、我が家に大きな試練が与えられました。

ある日、主人が自宅付近で自転車事故により骨盤骨折となりました。手術後、院内感染により、再手術となりました。この入院中に、実は事故の前から、多系統萎縮症という運動神経を司る小脳が萎縮する進行性難病が与えられていたのですが、その病によって、いつしか思うように会話が出来なくなり、書くこともままならなくなっていました。

主人が入院して半年ほどの間、私は病院まで片道二時間の電車の中で、考えても考えてもどうして良いかわかりませんでした。「神様、助けて下さい。どうしたら良いのか教えて下さい。これ以上の苦しみを与えないで下さい。助けて下さい。助けて下さい」と毎日心の中で叫んでおりました。

わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。  
(ヘブル 13:5)

その後、主人は立つことが困難になり、近くの介護施設に入所となりました。そして次第に耳も遠くなり筆談や表情や口のかたちで言葉を交わすようになっていきました。

そのような時でした。私は我が家の近所での青梅家庭集會に導かれ、そこでお会いしたキリスト集會の宣教師ベックさんが、入院中の主人のところにいらして下さったのです。ベックさんはしっかりと手を握りながら語って下さいました。主人は、最初は恐れ多いとかしこまっていたましたが、ベックさんのお話を聞いて、喜びで舞い上がり、子供のようでした。その時の光景は私の中にしっかりと焼きついています。

翌日、私は主人が立てるようになったのではとの思いに、じっとしていられなくて大急ぎで主人のところ



に行きました。主人は笑顔で私を待っていました。主人は、震える手で、ギザギザの字で「ミスター・ベックは、おいらの先生」と書いて、満面の笑みでした。一点のくもりもない晴れやかな笑顔で私を見つめました。嬉しかったです。主人は絶望から抜け出すことができました。それから、私たちの心の支えは聖書のみことばになりました。主人はいつも柔和な顔で、聖書のみことばを一語ずつ丁寧<sup>ていねい</sup>に、その意味をかみしめながら読み、満足そうにうなずいておりました。

ベランダに出ると富士山がよく見える部屋に、集会の皆さんからいただいた沢山のみことばカードを貼らせていただきました。施設のスタッフの方に「平井さんの笑顔に励まされています」とおっしゃっていたいたり、主人の諸々の手続きのために来て下さったあの方から「あの笑顔はどこから来ているのですか?」と聞かれたこともありました。また、集会の皆さんの優しく温かいお心遣いに今でも言い尽くせない思いと

様、感謝します」と感謝のことばが自然と口から出てきます。

この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。  
(ローマ 5・5)

どうか、望みの神が、あなたがたを信仰によるすべての喜びと平和をもつて満たし、聖霊の力によって望みにあふれさせてくださいますように。  
(ローマ 15・13)

八十歳になる今まで神様はすべての事に関<sup>かかわ</sup>って下さり、導いて下さり、助けて下さいました。神様を信じている主人と私を会わせて下さり、平凡ですが明るく楽しい家庭を築かせて下さいました。仕事を定年退職してまでもなく与えられた病に苦しみ絶望している主人を希望へと救い出して下さいました。吉祥寺キリスト集

感謝でいっぱいです。

主人は、それから約九年間におよぶ、時に激しい痛みを伴う闘病生活の後、二〇一六年五月二十五日、天に召されました。

お別れ会では、集会の皆さんのあたたかなご奉仕をいただき、また、ベックさんは体調がすぐれない中、力強く聖書のみことばを語って下さいました。

それからずっと今も、私は多くの兄弟姉妹方にお世話になり、助けていただいています。聖書、みことば集『日々の光』、集会の冊子や証し集『主は生きておられる』、インターネットを通しての福音メッセージや証しによって沢山のことを学び、励まされている今日この頃です。また、賛美歌集『日々の歌』や朗読も聞いています。本当にすばらしいです。

イエス様の十字架のみわざ、よみがえり、注がれている御霊様を思いますと朝に、昼に、夕べに「イエス

会に導いて下さり、打ちひしがれている主人にベック兄は「すべては神様がなさったことだから感謝して祈りなさい」と仰<sup>おんや</sup>って、主人の手をしっかりと握り続けて下さいました。その時にいただいたみことばを喜んで生涯大切に致しました。

私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。  
(ピリピ 3・20)

私はキリスト集会に導いていただいて、多くのことを学び、それまで気づかずにおりました主の大きなご愛と恵みを知ることができました。

戦争が始まろうとしている時、母は胎内<sup>たない</sup>にいた私のことをどれほどに祈ったことでしょう。「主、我を愛す、主は強ければ、我弱くとも恐れはあらじ」(賛美歌よ

り)といつも歌わずにはいられなかったのだと思わされます。

生まれる前から、私はあなたに、ゆだねられました。母の胎内にいた時から、あなたは私の神です。

(詩篇 22・10)

今、日曜学校で夢中でやっていたようにみことばの暗誦を心がけています。覚えたみことばを朝ごとに復誦し、助けられています。

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもつてささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。

(ピリピ 4・6、7)

平井成子(ひらいしげこ)

東京都豊島区池袋生れ、国立第二小学校、国立第一中学校、東京都立南多摩高等学校、杉野学園ドレスメーカー女学院卒、東京都青梅市在住

夫 仁志(ひとし)(二〇一六年召天)

長女 陽子、夫 昌弘、長男 浩輝

## 人間にとってすべては

田中順子



一番左が順子さん、集会の皆さんと

私は一九五一年、三人兄妹の末子として静岡市に生まれました。三十二歳の時イエス・キリストを神と信じ、洗礼を受けました。幼い頃より漠然とした神へのあこがれを私に与え、唯一の真理の神を知るようにと、先に神を知ったクリスチャンたちを用いて私を導いて下さった神様の証しをお話します。

### 二十代までの私に

中学校で、人間は猿から進化したという進化論を学びました。動物園の猿を思いながら、何万年経ったとしても、どんなに人間のような動作をしたとしても彼らがクラシック音楽を奏でたり、詩を作る事があるだろうかと考え、首を横に振りました。

技工士学校に行くようになり、解剖学の授業で、歯根膜と顎骨の間の細い繊維がクッションになり、固い物を噛んだ時は直接顎骨に当たらないようになってい

ると聞いた時、これは神様が造ったのだと思いました。偶然の進化でこの繊維が現れるとは思えませんでした。

私は尊敬する父を中心とした、心安らかな家庭で育ち、小学生の頃、神様に「こんなに良い人を私の父にしてくれて有難う」という思いを抱いた事があります。

父は家族だけでなく周りの人々からも信頼され慕われている。それに比べ私は、余りに誠実で他人を思いやる父に対し「もつと自分自身のことを思えば良いのに！」と憤慨するような嫌な心があると気付いていました。父のようにはなれない。ローマ7章18節は私の心です。

私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。

(ローマ 7:18)

また、本棚にあった太宰治、芥川龍之介の本から人間の複雑な心を知り、人とは何かを考える十代でした。十八歳の高校生の時、最愛の父を癌で亡くし、突然、雌鳥めんどりの羽の下に居た雛ひなが外に出されたように、うろたえました。これからの人生をどの様に生きるのか相談しようと思いましたが、校長室前に二度立ちしましたが、ノックする勇気がありませんでした。その校長は、仏教学者で仏教の本を出版したという新聞記事を、卒業して数年後に目にしました。ノックしなかったのは、人生の歩みで大切なのは宗教や哲学ではなく、永遠の命、神の愛であることを知るよう全能者が阻はばんで下さったのだと今はそう思います。

自分で人生を考えるしかないと感じ、この世を見れば善と悪がある、神は悪をも許すらしいので、私がすべてを体験し、若くして死んだ父にあの世で会えたら話そうと決心しました。

私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かつてな道に向かって行った。

(イザヤ 53:6)

あなたがたは、異邦人たちがしたいと思っていることを行い、好色、情欲、酔酒すいしゅ、遊興ゆうきやう、宴会騒ぎ、忌むべき偶像礼拝などにふけたものですが、それは過ぎ去った時で、もう十分です。

(1ペテロ 4:3)

こんな生活は長い事するものではないと思っっている時、「アメリカ、ホームステイ希望者募集」の新聞広告を見て、英会話も出来ないまま飛行機に乗りました。二十九歳の年でした。

様々なクリスチャンを通して

アメリカのホストマザーのジニーはクリスチャンでした。私はクリスチャンへの偏見があり、堅苦しくて、淑やかで私の性格には合わない、もう少し陽気な明る

い家族が良かったと思っていました。ジニーは私のホストファミリーになる事を「祈って決めた」と言ったので、それはどういう事かと心に残りました。

ジニーが「イエス・キリストを知る者は天国に行く」と話してくれた時、私は亡き父を思い、「日本人は親の背中を見て生きる、父がイエス・キリストを知らずに地獄へ行ったとしたら私も喜んで地獄へ行きます」と言って反発し、これでもうジニーは私にキリスト教の話をしないだろうと思いました。

そんな私も、他にやる事がなかったのである日ジニーの教会について行きました。初めての礼拝、クリスチャン、頭を下げる姿、慰め合う姿を眺め、神社で拝む様子とは違う、と思いました。

神を求めようと思った三十代

米国から帰国後、逆カルチュアショックを受けました。アメリカでの生活は水を得た魚のように感じてい



たので、私には日本の文化が合わないのだと分かり暗くなりしました。また追い打ちをかけるように友人とたった三分の電話で仲違い<sup>なかつた</sup>。人生初めて自分自身に失望しました。それですべての友人関係を断ち、この際漠然とした神ではなく、どの宗教の神が真実を言っているのか調べてみよう<sup>よう</sup>と決心しました。そんな時、同じプログラムでアメリカに三か月滞在して、既に帰国していた人と英会話サークルで偶然再会しました。帰国後の悩みを話すと、彼女の行っている教会に誘ってくれました。それまで彼女がクリスチャンだとは知りませんでした。翌週から礼拝に通いました。私は突っ走っている馬の手綱を思いっ切り引つ張って人生の方向転換をしているようでした。

日本で初めての礼拝で、日本語の賛美を聞いた時に涙が流れました。まるで乾いた土の割れ目に温かい水が浸み込む様でした。

聖書は毎晩開いてみました。しかしすぐ眠くなり

メッセージも分らない。誰かに質問したいと思っ  
ている時、夕食に招かれたお宅で、カトリックのカナ  
ダ人校長先生にお会いし、聖書について教えて頂きたい  
とお願ひしました。先生は早速時間を作って下さいま  
した。初めて話して頂いた内容は忘れられません。神  
が「光よあれ」と言っ出て来た光は普通の光ではない  
と聞かされた時、私は咄嗟<sup>とつさ</sup>に「テーブルの下に隠れよ  
う、でもこの光はレントゲンのようだから隠れても無  
駄だ」と思わされた事です。

悪いことをする者は光を憎み、その行ないが明るみに  
出されることを恐れて、光のほうに來ない。

(ヨハネ 3:20)

人とその妻は、神である主の御顔を避けて園の木  
の間に身を隠した。

(創世記 3:8)

私がアダムとエバの罪の性質を受け継いだ者であ  
ると、その時はまだ知らなかったのに何故隠れようと  
思ったのか不思議です。

聖書は相変わらず分らず、ある夜、読み切れる短  
い箇所を探したら伝道者の書を見つけました。「空の  
空。すべては空。日の下で、どんなに労苦しても、それが  
人に何の益になろう。」(伝道者1:2-3)と空しさが  
書かれてあり、その時「聖書はすべて、神の靈感によるも  
の」(2テモテ3:16)というみことばが思い出され、人  
間は何千年経ち、環境が変わっても本質は変わらない。  
神が人を造られたのだと確信し、思わず布団の上に正  
座してしまいました。聖書が神の書と分かりましたが、  
まだ神が遠く何故だろうと思ひ巡らしていると、どこ

の教会にも十字架がある、十字架が鍵なのだ、と漸く<sup>やがて</sup>  
十字架を求める思ひになりました。なぜイエス・キリ  
ストは十字架で死ぬことになったのか、良い人間を間  
違って殺したんじゃないかと思ひながら、校長に質問

しました。校長は「田中さんがたった一人この世に生  
まれたとしてもイエス・キリストは十字架で死なれる  
のです」と。聞きながら脳裏に映像が浮かびました。そ  
れは十字架にかかっているイエス・キリストを傍<sup>かたわら</sup>で見  
ている自分、そしてその十字架は私のだと思っている  
ものでした。その時は何でもなかったのですが、その  
夜いつものように聖書を手にした時、突然、先程の映  
像が迫り、こんな愛を知らない故に犯してきた過ち、こ  
んな神を知らないで生きてきた事が十字架の犠牲の愛  
ですべて赦されたと知り号泣しました。神の存在、そ  
して私の神と知った日でした。求め始めて二年近く  
経った頃でした。

見よ、すべてが新しくなりました

この第二コリント5章17節のみことばは私の叫びで  
した。遠い西洋人のものだった聖書が私に直接語られ  
るようになりました。それは私の悟りでも努力でもな

く神の力です。神は生きていると知り、自分の生きる意味を知り、永遠の望みを持つ喜びの歩みが始まりました。しかし教会生活では喜びがしほまりました。全能の神に頼る歩みが見えなくなりました。アメリカのジニーは祈りの友となり手紙やテープを送ってくれ、私の苦しい祈りを励ましてくれました。

ジニーが私の祈りをハワイ滞在中、宣教団体の集まりで話したところ、あるアメリカの宣教師夫妻が静岡市に転居したとの情報があり、彼らに会いに行きなさいと手紙をくれました。その宣教師の名前を見た瞬間、神の御業に驚き大声が出そうでした。何故ならその宣教師夫妻は一か月前、教会近くのマンションに居を構えて私たちの教会に挨拶に来られていた方だったからです。神は既に彼らを私に送って下さっていました。彼等はインドでチベットのダライ・ラマにも福音を伝え、中国で宣教し、日本には英語教師として来ていました。

彼等のバイブルクラスで、主を愛し喜び、主を畏れ身を低くすることを学んだ七年間のおつき合いは、私の幼い信仰の歩みの大きな助けとなりました。その宣教師夫妻は一九九三年三月に帰国されました。

#### キリスト集會に導かれて

その年の五月、私の祈りにさらに続けて主は応えられました。私の祈りは「主を愛し歩んでいる人を見させて下さい」です。

ある日教会に時々来ている知人から電話があり、東京に居る妹のコーラス仲間から御代田「喜びの集い」に誘われて行つて来たこと、そこでベックさんという宣教師に会ったこと。そして、そのベックさんがいらつしやる清水の家庭集會へ誘われました。

四、五年前に、会つてみたいが東京なので会えるはずがない、と心の底に沈めたベックさんのことが、まるで水面に浮かび上がるように思い出されました。そ

れは、あるテレビ番組で、癌で入院中のニュースキャスター山川千秋さんに「死は終わりではない」と語る画面に映っていたベックさんの顔でした。私は早速確かめに清水の家庭集會へ行きました。ベックさんと初めてのお話し合いで「聖書の事は何でも私に聞きなさい」「そして夏の御代田「喜びの集い」では「真実なのはみことばだけだよ」と言われ、私が求めているものがここにあると強く導かれ、教会から離れ、キリスト集會へと移されました。

#### 住まいについての証し

あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。  
(詩篇 37・5)

初めての一人暮らしのアパート探しの時、自分の思いは退け、姉や母の勧めが主の道だろうと思ひ選択を

委ねる事にしました。しかし結局私の望む所に決まり感謝しました。

そこで日々を過ごしている時、なぜか明るいものを感じ不思議に思いました。日射しの為だろうかと思ひ程でした。それから間もないある日、暑中見舞のハガキが届きそこに「しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかって上ることができる」(イザヤ40・31)とありました。差出人は知らない方で、宛名も私ではありませんでした。すぐ差出人に事情を書いた手紙を送ると、その方は牧師で四国に転勤したとのことでした。この近所の新居に引っ越された知人の旧住所を書いてしまった事が判明して、その方もクリスチャンだと分かりました。早速その方を訪ね、牧師からのハガキが届きました。私たちはクリスチャンの少ない日本でこんな偶然は神様の業であると喜び合い、その後も良き友となり、良きおつき合いを与えられました。あの明るさは、ここが祈りの部屋だったからだ

#### 6人の証し

Unser Herr lebt

と思いました。神様が備えた部屋と確信しました。

## 次の住まい

二〇一五年には、みことばに示されて新しい住まいを探し始めました。私の希望は吉祥寺に行きやすい東の方面でした。しかし駅から一番近い事が決め手となり、思いとは異なつて焼津になりました。その決定が主の道だと確信したのは、契約した後マンションのメールボックスの開け方を不動産屋さんに教えてもらっている時でした。隣りのメールボックスの名前を見て驚きました。静岡の祈り会で、ある友人が長年救われる事を祈っている彼女の会社の同僚の名前がありました。六十以上もあるメールボックスで名前を書いてあるのは一、二軒だけ。その中で隣りには夫妻の名前が記載されてあったので、その人と分かりました。長年の祈りの対象者はまるで長年の友人のような親しさがあり、一人住まいのおつちよこちよいの私に、ご

夫妻は主が用意して下さった助け手であると、何かハブニングがある度に主に頭を垂れ感謝しています。ご夫妻がイエス様の愛に頼り、平安な日を一日も早く迎えられるよう祈っております。

## 最後に

振り返りますと、どうして生きようかと歩いた道は、父なる神、愛なるイエス・キリストと、出会い、神と共に生きるようにと、私はわからないまま、羊のように羊飼いに導かれたものでした。そして、それはこれかも…です。

わたしに聞け、ヤコブの家と、イスラエルの家のすべての残りの者よ。胎内たないにいる時からになわれており、生まれる前から運ばれた者よ。

あなたがたが年をとつても、わたしは同じようにす

る。あなたがたがしらがになつても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。なお、わたしは運ぼう。わたしは背負つて、救い出そう。

(イザヤ 46・4)

人とは、何者なのでしょう。あなたがこれを心に留められるとは。人の子とは、何者なのでしょう。あなたがこれを顧みられるとは。

(詩篇 8・4)

十字架の愛を知つて間もない頃、三十代の敬老の日突然将来の事を考え、自分が年老いて、腰の曲がつた状態を想像し、急に不安を覚えました。目の前に聖書があつたので、そうだ、頼るのは神様と思い、とにかく

あなたのあわれみは大きい。主よ。あなたが決めておられるように、私を生かしてください。

(詩篇 119・156)

読もうと開いた所が、このイザヤ46章3節でした。はじめて読む所でした。3節「わたしに聞け、ヤコブの家と、イスラエルの家…」私には関係なさそうと思いなが

結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとつてすべてである。

(伝道者 12・13)

らも、読み進めると、4節を読み、驚きました。今、不安を覚えた私に、約束することばでした。ぶ厚い聖書、ここを開かせる力のある神、みことばによつて、応えられる父なる神様との会話を体験しました。

白髪しらがになった今も、私に語ります。そして、死を迎えた時は、私はこの方とお会いするのです。

田中順子(たなかじゅんこ)  
静岡県立静岡城北高等学校、日本生命静岡支社、日本大学歯科技工士学校

## 6人の証し

Unser Herr lebt



## すべてが主の御手のままに

早川 節子



ご主人の幹雄さんと

私が四十年間の「統一教会」の生活から脱け出し、イエス様の道へ来ることができたのは、すべて神様、イエス様、聖霊様の導きだと実感し、確信していて、今は感謝するばかりです。

なぜだかわかりませんが、小さい頃からイエス様にとっても関心（こんな言い方は失礼でしょうか）がありました。記憶では周りにクリスチャンもいなかったのですが、心の中で「イエス様」という言葉がいつも響いていました。

高校一年の時、友人に連れられて初めてカトリックの教会に行きました。でも聖書を読んでもサッパリ訳が分かりませんでした。ただ、マリアが聖霊によってイエス様を身ごもったと書かれている点がとても気になって、神父様に聞いてみました。神父様曰く「聖書に書かれてあるのです、そのまま信じなさい。」と言われ、「そんなバカな事…」と、その時は思いました。「聖霊」という意味も分かりませんでした。それ以降、教会に

行くこともなく、共産党の青年組織「民青同盟」に入って部落問題研究会を作ったり、全く神様とは関係なく、ただただ正義感だけを振りかざしているような日々でした。

そして十八歳の時のことです。私は岐阜で仕事をしながら短大に通っていました。将来の夢は、保母として海外青年協力隊でアフリカに行くことでした。ある日、仕事を終え（その時の事をよく覚えています）、積み上げられた綿花の上に友人と腰掛け、夕焼けを眺めながらとりとめのない話をしていました。二人してふと、「神なんていないよね」と言葉を発した途端、「いるのだ！」と、どこからともなく声が聞こえてきたのです。私だけが聞こえたのではなく、友人もその声を聞いたと言いました。すぐに二人で教会に行こうと思い立ち、電話帳をあちらこちら開きながら片っ端から電話をしました。

そのとき「統一教会」のことを知ったのです。三日間

の修練会があるとの事で、二人で参加しました。そして二人して献身を決定したわけです。「統一教会」の教祖「文鮮明」が再臨主だと聞かされ、本当にそうだと思ひ込みました。再臨のメシアならば、私はその方について行かなくてはと思いました。何の疑問も持ちませんでした。詩人である八木重吉さんの詩集の中には、すべてを投げ出してイエス様の許に行きたいという思いが書かれています。私もこの方が再臨主ならば、一生ついていこうと決意しました。たとえどんな人が裏切ろうとも、私は絶対に裏切らないと決心し、仕事も学校もやめて献身の道を行いました。

そして四十年間、少々の疑問などはありましたが、それは枝葉にすぎませんでした。私の信仰生活は結構楽しく、そして良き夫にも恵まれ、子供三人を育てる事ができ、また保育室の園長になって「統一教会」の子供達の教育もできるようになりました。四十年間は自分なりに幸せな日々を過ごしてきました。ただ今思えば、罪

の意識というものが欠けていたような気がします。イエス様はよく四十年間も忍耐してくださったものだとつくづく思われます。

そして忘れられぬ一九九九年三月、ブラジルのジャルジンという所で、四十日間の夫婦修練会が開催され、私達夫婦も参加しました。そこで人生の第二ステージを踏むことになるとは、全く思いもよりませんでした。ブラジルの広大な大地に突然稲光<sup>いなびかり</sup>が走り、その光を見ているとき、四十年前に体験したような声が聞こえてきました。「違うのだ！」という声でした。心の中の声なのか何なのか分かりませんでした、その声に押されるように、「何が？ 何が？ 何が違うのだろうか？」と急に色々な疑問や驚きが込み上げてきました。不思議なこと、教祖が近づいてきて私の横を通った時、今までとは全然違う感覚を持つてしまいました。

日本に帰ってから、聖書をもう一度読み直し、いろいろなキリスト教に関する本を読みあさりました。

ちょうどその時、アメリカの大学に留学している次女から電話があり、「ママ、私も聖書を読んでいるの」と言われ、二人していろんなメッセージを聞いたり、本を読んだりしました。

そしてわかったのです。それは、「再臨の主はまだ来られていない！」ということです。終わりの日が近づいてはいるけれど、今はまだ来られていない、再臨の主は終わりの時に来られるのだ、という事が黙示録に明確に書かれていました。そしてマタイの福音書24章4〜6節に「人に惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名のる者が大ぜい現われ、『私こそキリストだ。』と言って、多くの人を惑わすでしょう。また、戦争のことや、戦争のうわさを聞くでしょうが、気をつけて、あわてないようにしなさい。これらは必ず起こることです。しかし、終わりが来たものではありません。」と書かれています。私は知らないうちに偽りのキリストとともに歩んできたのだとわかり、悔しくて申し訳なくて、この

罪への怒りの矛先<sup>ほこさき</sup>をどこに向けていいのかもわからず、泣き崩れました。祝福という名の下に夫と一緒にあったのも、この偽キリスト<sup>にせ</sup>が選んでくれてそうだったのだし、子供達にも「統一教会」の原理の道を一緒に歩ませようとしてきましたし、保育室のたくさんの子供達にも偽キリストのことを教え教育してきました。何と大きな大きな罪を犯してきたのでしょうか。もう前に進む事ができず、苦しくて苦しくて、その後何年もの間、地獄の生活を送りました。

でもそんな時、イエス様から箴言16章4節、「主はすべてのものを、ご自分の目的のために造り、悪者さえもわざわいの日のために造られた。」という聖句が与えられ、そんな間違いだらけの中からでも、主イエス様は私を捨てずに掴み出してくださいました。ただただ感謝でした。

そしてもうこれ以上、偽キリストには仕えられぬと決意して、アメリカにいる次女に電話をしたら、何と

彼女も——彼女は子供三人の中で一番、「統一教会」の

教育を熱心に受けており、「二世部長」までやってきた子です——「私もイエス様のもとに帰ります」という答えが返ってきました。彼女が先に洗礼を受けクリスチャンになり、その後、私も彼女の大学卒業の時に渡米し、洗礼を受けました。そして離婚を覚悟して、夫に思い切って、クリスチャンになった事、「統一教会」を離れた事などを伝えると、何と夫は、「僕も洗礼を受けたい、イエス様を受け入れたいよ」との答えです。何という奇跡でしょうか！ イエス様の導き以外の何物でもありません。次女は同じクリスチャンであるコスタリカの方との結婚が決まり、家族で結婚式に行った時に、夫は洗礼を受けました。私と夫と次女の三人同時に、イエス様は導いてくれました。本当にびっくりしました。

夫はガンで六年前に召されましたが、イエス様に守られ、とても安らかに天国へ旅立ちました。その時の一年間は、イエス様の導き以外の何物でもない、奇跡

の連続でした。夫が天に召される最後の瞬間に、夫は少し起き上がるように頭を上げ、目を見開いていました。そして、安らかな顔つきになってそのまま眠りにつきました。外見的には亡くなったのですが、その時、夫が何かを見ていた事は確かです。ただ、私にはそれが何なのかわかりませんでした。その後ずっと、五年の年月の間「あれは何だったのかな？」と、心のどこかでいつも思っていました。その答えをある兄弟の証を通して主が教えてくださいました。夫はイエス様を見たのです。夫はびっくりしたように一瞬驚きの表情をしました。次の瞬間安らかな顔になって眠りました。私達は「安らかに亡くなったね」と言っていました。だが、あの時、夫はイエス様に連れられて天の御国に行った事がわかりました。聖書に書かれている事はまさしく真実だと確信しました。

今は、長女と長男とも、まだ宗教というものを毛嫌

いしています。特に長女は、私達の間違った信仰ゆえにパニック障害を抱えて今も苦しんでいます。彼女を見ていて、私達夫婦の罪を思い知らされます。でもこんな私の為に、四十年間も忍耐して導いて来られたイエス様がいらっしやいます。しかも、完全なる勝利をおさめられた方です。きつと長女と長男のことも導いてくださると確信しています。

日々、まだまだ罪との戦いはありますが、とにかく私達一人一人がどれほど大きく愛されているのか。毎日毎日驚きばかりです。あまりにイエス様の愛が大きくて、言葉になりません。今は、このキリスト集会に来られたことを、本当に感謝しています。神様はちゃんと見ていてくださり、最良の場所に導いてくださったのだと思います。

イエス様、ありがとうございます。

早川 節子（はやかわ せつこ）

一九四九年十一月二十六日生まれ、聖徳短大中退

夫 幹雄（召天）

長女 尚花

次女 治花、夫 アレックス、長女 ハンナ、

次女 アリサ

長男 基雄





# 神は愛です

ゴットホルド・ベック

愛のない者に、神はわかりません。なぜなら神は愛だからです。神はそのひとり子を世に遣わし、その方によつて私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。

(1ヨハネ 4:8-10)

神は愛です。

しばしば人間は、今まで続けてきたことを、もうやめるべきではないか、という問いの前に立たされます。たとえばある人は、何かの仕事を始めたけれども、それによつて出てくるものは問題ばかりで、そのために

絶えずお金を注ぎこまなければならないような時、その人は、その仕事を続けるべきか、一日も早くやめるべきであるか、という問いの前に立たされます。また別の人は、自分に悪い影響を与える友達を持っています。その人は、自分がしたくないことも、その悪友によつて誘惑されてやってしまうのです。その場合の問いは、この悪友から離れるべきか、あるいはこの状態を続けるべきか、ということでありましょう。しばしば最も良いことは、一日も早くやめること、今の状態に終止符を打つことです。

しかし、もつとはるかにむつかしい問題があります。それはたとえば結婚生活です。いろいろな不一致が起こつてくると、多くの人は、今まで続けてきた状態や

関係をやめてしまいたいと思うのです。つまりそのような人にとっては、離婚こそ、問題解決のただ一つの道となるのです。しかし、ほとんどすべての場合に、離婚は問題の解決にならないのです。なぜなら、そのことによつて出てくるのは、ただ新たな問題と困難であるからです。

また現在、もはや何の生きる道をも見ることができず、人生に終止符を打ちたい、今までの人生に終わりを告げたい、と思っている人もいます。しかし、これもまた、逃避に過ぎないのです。というのは、死によつてすべてが終わるのではないからです。

私たちの地上の生活の次には、永遠がやってまいります。そうしてそこで、すべての人が直面する最初のものは、神の裁きです。たった一人で、主なる神の裁きの前に立つ者は、失われた、また呪われた者であります。しかし、主イエスを弁護人としてもつ者は、救われて永遠のいのちを持つことが許されているのです。

神は愛です

今のこの地上での生活は、私たちが永遠に対して、正しい決断を行なうこと、すなわち主イエス・キリストを受けいれて、主なる神との交わりを持つための準備期間です。

イエス・キリストを知ること、神が一人一人に提供してくださっておられる新しい出発点です。自分心の生活をやめて、主イエスに従ってゆくこと、このことこそ、救いと解放を意味するのです。悪魔は、いわゆる宗教に対しては反対せず、また哲学や理想などといったものに対しても反対しません。しかし、一人の人間が主イエスの後に従っていかうとすると、猛烈に反対するのです。悪魔は人間を惑わして、神に対して不信の念を持たせようとするものです。その結果多くの人びとは、神は私たち人間から、すべての喜びまた楽しみを奪い取ってしまうと思ひこんでしまうのです。そうして主イエスに従うということは、重荷を負わなければならないこと、すべてのことを断念しなければならないことであると思ひこんでしまい、人間はまっ

たく制限されたものになってしまうと、思いこんでしまうのです。

ごく少数の人だけが、神は愛であること、また主なる神は私たちのことをいつも配慮してくださること、そして、神に信頼する人は誰でも、本当に助けていただける、ということを知っています。ただひとり、神だけが、絶対的な信頼に値するお方であるにもかかわらず、この神から期待する人は、何と少ないことでしょうか。これは最大の悲劇です。

神が愛ならば、どうしているいろいろなことが起っているのでしょうか。世界中の悲惨な出来事がどうしてあっているのでしょうか、という人がいます。すなわち大部分の人びとは、この地上における不条理の責任は神にあるのだ、と言わんばかりに、神の存在を否定するのです。たしかにこの地上では、愛のない状態や、残酷な状態が存在しています。しかしその責任は神にあるのではなく、人間と、人間の罪にあるのです。

神は愛です。このまことの愛は、その恵みと行いの

れは大きな愛です。

第三に、神は、人間に自由意志をお与えになりました。私たちは、操り人形ではなく、神に自由を与えられた被造物なのです。人間に決断の自由を与えること、これも愛です。

第四に、神は人間に、戒め及び律法の中に、ご自分のみこころを明らかに示してくださいました。神は律法を破った者が、いかなる罰を受けなければならぬか、ということに対しても警告を与えてくださいました。人間を盲目的に、自分の運命へ行かせてしまわないことは愛です。私たちは、人間が神の掟を守らなかつたことを知っています。人間は神から離れ落ちてしまったのです。人間は神に対して罪を犯してしまったのです。

最後に、第五番目として、愛の最大の証明が、十字架におけるイエス・キリストの死であることをあげなければなりません。そこでイエス・キリストは、血を流して私たちの罪を贖ってくださいましたのです。

神は愛です

中に現われます。神のみことばである聖書は、神が憐れみと恵みに富みたもうお方であり、忍耐深く、真実で、愛なるお方であると言っています。そのように、主なる神は、神のみことばである聖書の中に、ご自身を顕わしておられるのです。私たちは、神のなさり方が、神の愛と一致しているかどうか吟味してみることができます。

そこで次に、神の五つの行いについて、簡単に考えてみましょう。

まず第一に、神は人間を造られました。しかしその前に、神は宇宙と地球を、人間の住む所としてお造りになりました。神は人間に、住まいとして樂園をお与えになりました。人間の住む所を完全に備えてくださること、これこそ愛であります。

第二に、神は、アダムが一人であることをご覧になりました。そして配偶者として、エバをお与えになりました。人間が一人であることを終わらせること、こ

それでは、イエスとは、いったいいかなるお方であるのかについて考えてみましょう。

まず第一に、イエス・キリストは立派な人でしょうか？

そうです。イエス・キリストは、最も立派な人です。まず、イエスは一度も罪を犯したことがなかったただ一人の人間なのでした。

第二にイエスは、偉大なる神の人でありましょうか？

そうです。イエスは、ご自分の考えと意志が、父なる神の考えと意志と、まったく同じものである、ただ一人の人間でした。

第三にイエスは、ユダヤ人の王さまでありましょうか？

そうです。イエスは、最も力のある支配者であります。この地上におけるすべての力と権力は、主イエスに与えられているのです。

第四にイエスは、神の子でありましょうか？

そうです。聖書はそのことを、はっきりと証しています。

イエス・キリストは、神ご自身であります。

イエス・キリストは、偉大な栄光に富みたもう完全なお方であります。

はじめから一度も罪を犯したことの無い、ただ一人の人間は、人間となつてくださった、神の子イエス・キリストだけです。父なる神は、私たち人間の罪の身代わりとして、イエスを罰しました。イエスは私たちの身代わりとして、十字架で死んでくださいました。過ちは、ただ一度だけ罰せられれば十分です。イエスが私たちの罪のために身代わりとして、罰をお受けになってくださったゆえに、父なる神は、私たちを恵んでくださいます。イエスは、十字架で、私たちの債務を贖ってくださいました。そして、私たちのために、神に至る道となつてくださいました。このすばらしい、主イエスの尊い死のみわざを少しでも理解するものは、

神の愛を発見することができます。

これこそ、神の愛です。すなわち、神のみ子、主イエスは、ご自分に対して、嘲りや輕蔑けいべつだけしか与えない人間の身代わりとなつて死んでくださったのです。これほど高価な代価を、神は私たちのために支払つてくださったのです。

そしてこれらすべては、神の側からなされました。主イエスは、完全な贖いを成就してくださいました。今や、提供された救いを受けるかどうかは、私たちにかかっています。

では一体、どうしたらよいのでしょうか？ 救いを受け取るのは、悔い改めと信仰によつてなされるのです。私たちは、私たちのために十字架でなしてくださいましたイエスのみわざを受け取らなければなりません。救い主、また主としてのイエス・キリストを、私たちは、自分たちの生活の中へ、受け取らなければなりません。そして、主イエスに、すべてを明け渡さなければなり

ません。しかし、これはいのちを捨てることではなく、まったく新しい出発、まったく新しいいのちが与えられることを意味しています。

主イエスに従う人生は、平安の人生です。あらゆる絶望や不安や不安定さは消え失うせます。というのは、神の子をもつ者は、永遠のいのちをもちます。これこそ、本当の幸せであります。

『光よあれ』第一集より



神は愛です



# 大切なことについて

ゴットホルド・ベック

現代人は、ますます見せかけだけのほかない物の世界の中に生きるようになっていきます。私たちは、本当に大切なものを見ることができなくなっているのではないのでしょうか。私たちは、テレビ・ラジオ・新聞・週刊誌などのマスメディアから無分別に影響を受け、激動する毎日の出来事で、個人や、家族や仕事上の些細な事柄にふりまわされて、それらの虜（とりこ）になって生活しています。

私たちは、このような時代の流行に流され、この世界の小さな一時的な事柄にかまけており、私たちの人生における最も重大な事実から目をそらしてしまっています。

イギリスの偉大な政治家ウィンストン・チャーチ

を虜にしているものが、一か月後も、一年後も、十年後も、二十年後もなお意味を持つものでしょうか？」と。

確かに人は、人生の小さな事柄を簡単に無視することができません。しかしまた、それを過大評価することによって、本質的なものから目をそらすことも許されません。ひとりの人間の人生において、本当に大切なものは、死の直前の三十分前においてなおも重要な意味を持ち続けているものだけです。

ここで二、三の歴然たる事実を皆さまの前に提起することをお許しください。この世界の創造者は、ご自分の被造物を決しておろそかにはなさいません。主なる神様は生きておられ、イエス・キリストのかたちでご自身を啓示なさいました。主イエスには、天地のすべての力が与えられています。主は今日もなおこの世界で働いておられ、ひとりひとりの人間のことを考えていてくださいます。

本書の中で証しをしてくださいましたすべての方々は、これらの真理を身をもって経験なさいました。そ

大切なことについて

ル卿は、彼の『回想録』の中で、ある一人の老人の臨終に立ち合ったことによって、いかにチャーチルの心の目が開かれたかを記しています。それは戦争のさなか、一九四一年のことでした。その老人の臨終の言葉はチャーチルに、本質的な事柄への洞察を迫り、当時の戦況における苦境と困難に立ち向かう大きな助けとなったのでした。その老人の言葉とは、次のようなものでした。

——私の心配の大部分は虚しかった——

私たちもまた、毎日の生存競争の中で、そしてまた私たちの人生の大小様々な苦しみの中で、マスメディアによる圧迫のもとで繰り返し次のことを問うべきです。今私たちを圧迫し、あるいは特に大切なものとして私

の人たちはみな、次のように告白せざるをえませんでした。私たちを神から引き離すものは、私の自我であり、私の意志であり、私の誇り、私の自己中心、妬みの固まり、すぐにくよくよするような心の状態です。

しかし、このようにただ自分だけにより頼む自我は不安定で動きやすく、疑い深く、一度行つた決断が正しいか間違っているかを決して知ることができません。このことがその人たちに明らかになった時、その人たちは決断しました。彼らは自我を主イエス・キリストに引き渡しました。彼らは強情で、頑固で、自己追求的で、孤独なそのありのままの状態で、イエス様のみもとに行きました。

彼らは思い切って、直接イエス様に次のように祈らざるをえませんでした。

「主イエスよ、あなたは私の主であり救い主です。私は今まであなたを知らず、あなたなしに生きてきました。どうか主よ、私をお赦しください。私はありのままの状態であなただけのところに行き、あなたの

血潮で、私を潔めてくださるようお願いします。

主イエスよ、私は私の人生の支配権をあなたに明け渡します。どうかあなたのみこころのままに私を造り変え、あなたが私を必要となさる所で私をお用いになってください。私の主、また私の神に心から感謝します」

この態度を取るとき、平安が心の中に入ってきて、人は宗教の強制力と間違ったやり方から解放され、確実な将来を持つようになります。どうか、自分自身に對して正直であってください。この決断を逃すことだけはしないでください。生ける神は、義務的に日曜日だけ教会に行き、それから一週間は毎日自分勝手な生活をするという人ではなく、月曜の朝から土曜の夜まで、毎日の大変な生活の中であって、よみがえられた主との結びつきが喜びと平安と力となっている人を求めておられます。その時にだけ、初めてすべての不確実性と不満足の代りに、あなたの人生ははっきりとした主イエスのご臨在によって、平安と希望に満たされ

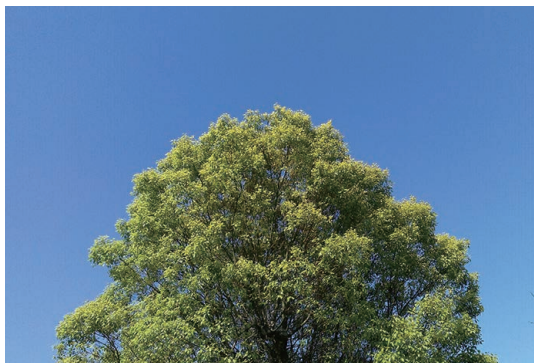
たものとなります。

あなたはいろいろな証しをお読みになって、一人ひとりの人生における神の導きをどのように思われたことでしょうか。その人たちがみな、まったく同じことを、まったく同じように経験しなければならなかったと感じにいられたのでしたら、それは間違いです。一人ひとりの導きは多種多様なのです。

しかし、すべての人の証しに共通していることは、神のことばは真理であるという事実です。聖書の中にこそ、神のみこころが啓示されています。方向を指し示すものは、何かの経験ではなく、神のことばだけです。

それですから私は、心から次のことをお願いします。どうか「主よ、語りたまえ。僕は聞きます」という態度で、神のことばである聖書を真剣に読んでください。そうすればあなたは、聖書の中に、新しいのち、永遠のいのちを見出すに違いありません。

『光よあれ』第一集より



# キリスト集会へのご案内

## 吉祥寺キリスト集会

【電話】 0422-21-8450 (集会所)  
東京都 武蔵野市 吉祥寺 本町 4-9-11  
〒180-0004

日曜礼拝・福音集会 10:30 / 18:30

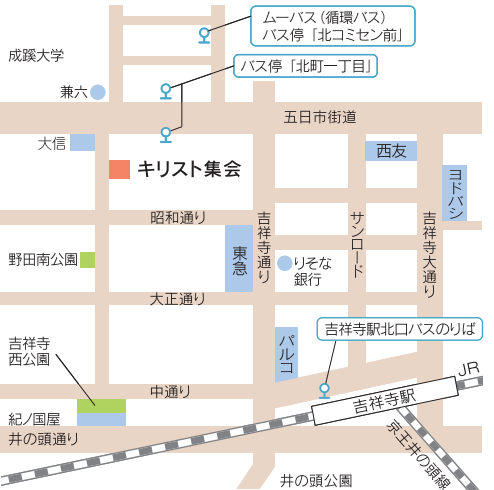
火曜学び会 11:00

木曜祈り会 19:00

子供日曜学校 9:30

中高生日曜クラス 9:30

【バス】 ご利用の方は、吉祥寺駅北口バスのりば  
「1番のりば」「2番のりば」より乗車して  
「北町一丁目」で下車してください。



## 牧師制度がありません

キリスト集会には牧師制度はありません。

いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、  
純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

## 組織も、会則もありません

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会議も、会則もありません。

みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によることばをもつてなされます。

## 会員制度がありません

会員として登録されるような、いわゆる会員名簿にあたるものではありません。

出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、  
主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

## 献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、  
無記名ですからだれがいくらさげたかは主のみがごぞんじです。

## 日曜礼拝

祈りと賛美がつつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、  
パンとぶどう液にあずかります。  
あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。  
礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

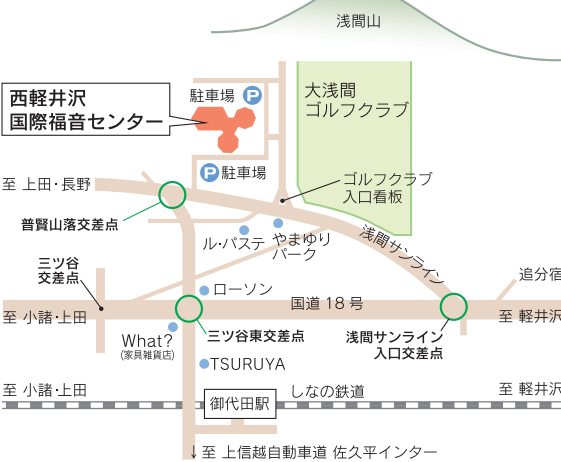
## 家庭集会

家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、  
福音の喜びをつたえる集いです。世界で百カ所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

## よろこびの集い

西軽井沢国際福音センターははじめ世界各地で開かれ、全国の人々が集まる大きな集会です。  
快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

## 西軽井沢国際福音センター



西軽井沢国際福音センター  
【電話】 0267-32-6400  
長野県北佐久郡御代田町塩野450-15 〒389-0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス  
【電話】 0267-32-6444  
長野県北佐久郡御代田町塩野450-33 〒389-0201

## アクセス

【鉄道】  
しなの鉄道で御代田駅下車。  
タクシーで 約5分 (1000 円程度)  
徒歩 約45分 = 3 Km

御代田駅へは東京駅より  
北陸新幹線にて軽井沢駅下車、  
しなの鉄道に乗り換えて三つ目  
御代田駅で下車。

【車】  
上信越自動車道  
佐久平インター下車 約20分 (約7km)  
■ 周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。





## モーセの十戒 神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック著

モーセの十戒は約三千五百年前、主がモーセを通してイスラエルの民に告げられた「十の戒め」です。そこには「聖なる神のみこころ」が現されています。ですから、当時のイスラエル人だけでなく、あらゆる時代の、すべての人間に対する訓戒とすることができます。そして、この戒めを真剣に受け止めるとき、人間は自分の罪深さを思い知らされ、罪の問題の解決を願ってイエス様による救いに導かれる、という恵みに与ることができます。ところが、この大切な「聖なる戒め」が、今はほとんど無視され、軽んじられています。それは近年の社会秩序の乱れとも無縁ではないでしょう。こういう時代であるからこそ、「十戒のメッセージ」に心の目を向ける必要がある、と思います。キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」が創刊号から12回にわたって「モーセの十戒」を連載し、それを単行本にまとめた理由もここにあります。



## すぐに起こるはずのこと—ヨハネの黙示録 (第1～4巻)

ゴットホルド・ベック著

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし、黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の学び会で、約1年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の1～3章、第2巻には4～7章、第3巻には8～15章、第4巻には16～終章までが、それぞれ収められています。



## 光よあれ —私たちは主のもの

証しシリーズ (第1～9集)

いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々を生きることができるようになったかを、多くの方が証しされています。第1集から第9集まであり、実に596人の方がそれぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。

## 実を結ぶ命 がんにうち勝ったドイツ少女リンデ

ゴットホルド・ベック編著

二十歳そここのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」(エレミヤ31・3)リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。



## なにもかも私たちが神の愛から引き離すことはできない (上・下巻)

ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。



## 絶えず祈れ (上・下巻)

ゴットホルド・ベック著

主は私たちが祈ることを望んでおられます。主なる神は、あふれるばかりの祝福を、私たちに注ごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれる扉を開けるのです。祈りの本当の大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまよりもさらに何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージが収められています。



■ キリスト集会の本、雑誌などの注文はハガキで下記迄。電話での注文は、お控えください。

注文先 〒180-0004 東京都武蔵野市吉祥寺本町 4-9-11 吉祥寺キリスト集会

## 集会の出版物



## 主は生きておられる 第59号

定価100円（税込み）2022年6月1日発行

|        |                      |
|--------|----------------------|
| 編集スタッフ | 岩本秀造 黒澤錬二 鈴木力        |
|        | 芳我幸雄 福留伸子 牧野正士       |
| 印刷・制作  | ニューライフ・ミニストリーズ 新生宣教団 |
| 題字デザイン | 飯守格太郎                |
| 発行所    | キリスト集会               |

キリスト集会のホームページ <http://christ-shukai.net/>

出版本を購入されたい方、お問い合わせ [webmaster@christ-shukai.net](mailto:webmaster@christ-shukai.net)

また、キリスト集会のホームページの「出版物」のサイトからもメールにてお問い合わせが可能です。